

---

# 技術師 in 魔法世界

kyouju

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

技術師 in 魔法世界

### 【Nコード】

N5102T

### 【作者名】

kyouju

### 【あらすじ】

西暦2345年、マニピュレーティングスーツの設計に携わっていたミノル オオツキは、開発現場で不慮の事故にあい死亡する。死んでから神に何かされるわけでもなく、気づいたら生後三歳の人間の子どもとなっていた。

学術都市国家プランジヤで育った彼は、戦争に登用される戦艦に疑問を抱いた。「いまいち迫力と威力に欠けるな。」と。

新たに人生設計を検討したミノル改めパウロ デイラックは迷わず設計技師の道を歩む。

後に鬼才と呼ばれる一人の男の物語。

総合PV200万突破、ありがとうございます。  
これからも頑張って書いていこうと思います。

人生とはサイコロにたとえられることがある。いや、もしかしたらポーカールームかもしれない。悪い札や良い札がでたりする。それはまるで神様のきまぐれのように。だが、神様なんかにはいくらお祈りしようとも自分の次にくる手札を覚えてくれない。だから、人は神様よりもずっと実用的で便利な概念『確率』を考え始めた。統計と組み合わせで天体の運動を正確に予測したり、ついには宇宙の終末まで予測するようになった。勿論未来を寸分の誤差なく予測できるか考えたが、現実とはそこまで簡単に収拾のつくものではなかった。科学的見地からはハイゼンベルクに「やっぱ無理。」と否定され、直感的にも明日の世界中の雲の動きを完璧に答えられる人間はいないのは自明だ。それほど世界は単純ではない。カオスの権化といえる。

無理やり自分の身に起こった出来事を確率で表してみようか。例えば、工場で不慮の事故に巻き込まれる確率とか。この例えは失礼なものだというのは重々わかっていても、あえて使わせてもらう。

この場合、普通は統計的確率を使う。一年に起こった同様の事故の件数を一年の工場稼働日で割れば、だいたいの確率が得られる。信頼度を高くしたければ、より標本を多くすればいい。過去五十年分のデータがあれば、それで十分だろう。統計的には。

では、ここで本題となるのは統計的確率が適用できない場合だ。例えば、死んだ後に違う世界に生まれる確率とか。この例えは考えるのも馬鹿らしいと重々わかっていても、あえて使わせて

もらう。

これは人間の手に余るものだ、と私は思っている。それどころか、その世界の全てに相互作用できる全知全能の神でさえ答えられるか疑わしいものだ。

さて、ここにきて私が何を言いたいかピンときた人がいるかもしれない。わざわざ長文の前書きを書いて、結論を「昨日の映画のキヤラメルポップコーンはおいしかった。」と締めるつもりは私にはない。こんな冗談めいた確率を考えるのは、実際それが自分の身に起こってしまったからだ。

西暦2345年、エネルギー問題はとうに解決され、半永久機関の民間開発も進んだ頃、ミノル・オオツキは一人のベテラン設計技師として宇宙作業用マニピュレータースーツを開発していた。大戦前に地球に到達した隕石から地球外微生物が拡散した後、共生された人間に変位種が増え始め、従来種よりも宇宙活動に適していたために宇宙進出が活発になり始めたのだ。世界が第四次世界大戦の最中に、私は機械弄りが好きすぎて太平洋連邦軍の技術部に入隊した。テレビの報道で僅かに映る未知の動力源を、画面に鼻をくつつける勢いで食い入るように眺め、堪能し、情勢を分析した結果、軍隊に入るのが近道だと考えたからだ。

太平洋連邦軍所属時は整備班で活動し、合間をぬってマニピュレータースーツの核心にあたる動力源の理論を必死に調べ上げ、排出される有害光子を除去する改良手段の考察を論文にまとめて上司に提出すると、すぐに設計班に異動し、程なく連邦特殊陸軍ATONEMENTに引き抜かれた。自分の設計した機械が多くの人を

殺すとわかっていたが、いずれこの技術が未来の発展に生きると信じて無心に作り続けた。

それから何だかんだで長き戦争が終わり、多くの同僚が民間に流れる中、私は軍部に残り以前より段違いに低い予算で開発を続けた。画期的な開発方法をさらっと編み出されてやっと、自分が退役間近であることに気づいた。最後に自分が携わった新型マニピュレーターイングスーツの稼働実験をしようとした。自分が触った機械の作動には絶対の自信がある。宇宙服を着て手に届く距離で稼働させていると、中から異常音が聞こえてくる。振り返って強化ガラスの方を見ると、部下達が何かを叫んでいる。

何をバカなことを言っている、早く伏せろ、と言って通信を切った。人生の最期までこいつと入れて嬉しかった。直後、私の後ろから光の翻弄が放たれ、私は宙に帰った。

事故の調査の結果、ほんの数ミリグラムの塵が動力源に混入していたことがわかった。稼働実験前の検査でもひっかからなかったそれを私は知る由がなかった。

私の意識が光速を超え、全天を包む銀の帳を潜り抜けた宇宙の外、真の無を一瞬照らした後、莊嚴の一言に尽きる白銀の巨樹群が現れる。

その木は世界。その枝は未来。

時間とともに無数の銀の枝が生えて、からみつき、時には折れる  
光景は残酷なほどに美しかった。見とれているうちに一本の枝が、  
淡く光る私の丸い魂に向かって伸びていき、それを突き刺した。私  
は再び闇に包まれ、意識も遠くなっていた。

s e c t i o n . 2 (前書き)

内容微修正。

眠気もとれ、自分を起こすと瞬く間に混乱した。上と下がわからない。わかるけど、感覚がまだ認識できてない。困った私は、ひたすら感覚認識の練習をする。腕を動かし、膝を曲げ、手を見つめ、音を聞き、枕を嗅ぐ。ようやく世界の秩序を認識できてほっと安心したつかの間、強烈な本能が私の意識を排除してしまった。ぐっすり私は眠る。

気がつけば、私は二人の男女の間に立っていた。手を繋いで一緒に歩き、私に慈愛の微笑みを浮かべる二人は私の新しい両親であった。彫りの深い顔で目から知性の光を漂わせる父、トマス・ディラックと、淑やかな姿勢を崩さずに、気さくに周りと接する母、マリ―・ディラックは、私に新たな人生と名前を与えてくれた。

私はパウロ・ディラック。前世の記憶と人格を受け継ぐ三歳児である。精神年齢が定年を迎えているのに手を繋いで散歩している現状に複雑な気分だった。考えてもみてほしい。子ども持ちのいい年したおじいさんが若い二人の男女と手を繋いでいる状況なのだ。端から見るとなんらおかしくないのだが、個人的にはたいそう居心地が悪い。そう、こう言い換えられるかもしれない。介護の必要もないのに、手を握ってもらって引っ張ってもらっている気分だ。

私がむず痒い顔をしていると、母が心配そうに私と視線をあわせてくれた。「パウロ、大丈夫？トイレに行きたいの？」生まれてからの記憶をほじくり返して、自分の言語能力を確認した。簡単な会

話はできていたようだ。あと、妙に難しい言葉を意味は把握していないが覚えている。おそらく両親の会話から聞きかじったのだろう。とりあえず返事をしなければ、と思い、つたない言葉を口にした。「お、お母さま。ボク、お腹がすいた」

「まあ、そんな時間かしら。あら、本当ね。お腹が空いてて当然だわ。もう帰りましょうか」

「ん、そうだな。パウロ、帰りにレストランに寄ろうか」

「えっ、お外で食べるの？」

「行儀よくするのよ。まあ、私の子に限って他の人に迷惑をかけるなんてないでしょうけど」

「ハハハ、パウロはおとなしいからな。将来が少し気にかかるよ」

もともと私はおとなしい部類だったらしい。自分の交友関係について少し不安を覚えるが、両親が本気で心配する程度ではなさそうなので保留とした。とりあえず、自分の置かれた環境調査と言語獲得にいそしむとしよう。記念すべき第一手はレストランのメニューを全て覚えることに決めた。

半年にわたって自分の手であれこれ調べたところ、この世界は自分が生きていた世界とは違うことがわかった。一番の違いはこの世界には魔法があることだ。もっと具体的に言くと、この世界は『カムシャフ』と言って、地球とはかけ離れた地形をしている。赤道の長さは約21000km、一日は地球時間で24時間43分1（腹時計）で、自分の住んでいる国は『独立学術都市国家プランジャ』だそうだ。南緯40度あたりで西岸海洋性気候に属しており、ちょうどフランスのような気候をしている。比較的気候に恵まれ、「一流の学問を修めなければプランジャへ」と謳われるほど政治、経済、軍事、錬金などあらゆる分野に才子才媛を輩出してきた伝統と実績のある都市国家だ。

さらに、この都市国家のプランジャたらしめる特徴は軍事力の保有だ。あらゆる軍事的圧力に屈しない強固な軍を統率し、デトネ連邦とシリンド帝国の二大国家に政治的中立の立場をとれる数少ない国家で、各界の門人とのネットワークは世界中に広がっており、そうそう敵に回せられないそうだ。

私はその都市の北の郊外のこじんまりとした屋敷に住んでいる。

父は外交官を勤めており、敏腕をふるって仕事に励んでいる。メリットは外国の友人がたくさんできること、デメリットは出張が多くて家族と離れる日が多いことだ、と父は言っていた。そして、父の職業の性質上、外国の要人がよく夕食をよばれにやってくるのだ。そのために母から行儀作法を三歳から叩き込まれるようになってしまった。まあ、前世は腐っても軍人だったので生ぬるい位だったが、だが、24世紀の人間でタバコを吸う人なんぞ自分の周りには一人もいなかった。タバコを吸う人は非常に苦手だった。特に、一度テトリル侯爵という渋いヘビースモーカーが来た日には、煙にむせてプディングをぶちまける所だった。次の日、父に邸内禁煙をお願いすると、きっちり父は気を利かせてくれた。結構子ども想いなのはありがたい。

母は元ペントリツタ旅団のエース級だったらしく、父と情熱的な恋愛をしていたようだ。自分の息子に対してにやけ顔で話すのだから、「あゝはい、そうですね。よかったですね。」としらけた気分になってしまったが、それを顔に出さずに「お母様はそうやって素敵なお父様に出会われたのですか。すばらしいですね。」とやんわ

りと褒めた私は腹黒演者に違いない。

階段を上がる足音がする。この一定のリズムは母、マリーだ。私は別段自分の行動を隠すこともせず、そのまま本を読み続けた。タイトルは『精霊魔法と内燃機関の歴史』。半年間でほぼプランジヤの公用語を理解した私は、父の書齋を制圧する気で本を借りている。両親から見れば、子どもが本に興味を持ち始めたか、と微笑ましい光景に見えるのだろうが、実際はこの世界の常識から始まってどの程度の文明レベルなのか、前世との大きな技術的差異は何か、とか今後自分の人生を設計する上で非常に大事な知識を、子どものスポンジのような学習能力でもって一気に蓄積している修羅場状態なのだ。

獣人や魔族がいる中で両親とも生粋の人間なのだから、人生ただか80年。それ以上生きれたら御の字なのである。私が人生の十分の一を生きるまでに、おおまかな軸を決めていなければ世の中に食いつぶされてしまう。いくら親が地位があるとか、金があるとか、コネがあるとか等一切関係なく、一度戦火に巻き込まれてしまえばただの動物に成り下がってしまう。必要なのは世の上の上に立てるだけの能力、実力を示せる積極性、類稀なる好奇心、人望を勝ち取る人格、これに尽きると前世からの経験で学んでいる。

自分は機械弄りが好きだ。機械を作ることとは天命なのだ。百回生まれ変わったら百回ともエンジンニアになる、とこれだけは胸を言い張れる。

ガチャリと扉が音をたて、母が書斎に入る。私と周りに積まれた本を見て、母はニコニコと歩いてきてギュッと抱いてくれる。

「ああ、私の賢いパウロ。こんなにちっちゃいのお父様の本を読んでかわいいわ。今からホウキに乗ってお買い物に行きましょ」  
「私を乗せてもよろしいのですか。買ひ物の邪魔になるだけかと思ひますが」

わざわざ人の乗り物に乗せてもらうのだ。一度お伺いを立てておかないとどうも気まずい気分になる。

「大丈夫よ。お母さんはグリフィンドラゴンをやっつけたことがあるし、パウロを乗せる位何てこともないわ」

玄関には母のメダルとトロフィーが飾られているのだが、トロフィーにはこう書いてあった。

『街を襲撃する直前のグリフィンドラゴンを城壁で先んじて足止めし、街を守った者に贈る』

たまたま外壁周辺を警備していた母が常備展開している探知魔法でドラゴンを発見し、無線で警戒を呼びかけた後、一人でドラゴンと応戦。仲間がかけつけた時にはドラゴンが瀕死に追い込まれていた。

なんと母は巨大な火炎球でドラゴンをすっぽり覆って炙ったのだ。例えていうなら、全身をビニール袋で包んで袋を燃やされたようなものだ。如何な生物であろうと、呼吸系を鍛えるのは難しい。

さらに風を操るドラゴンは総じて肺で空気を溜め込んでブレスを撃つ。周りの空気を全てイオン化させる数千度の魔法の炎はドラゴンの障壁をもともせず肺と気管を焼き、痛みにつんざいた際に吐いたブレスが点火剤となって火炎球の中でさらに莫大な熱を発生させる連鎖反応がスタート。火炎球が消えた時、すでにドラゴンは虫の息。仲間がドラゴンに思わず同情して角を折ってから治療魔法をかけ、丁重に森に帰したという。

それから母は『火刑のマリー』と呼ばれて嫌になった、と愚痴をこぼしていた。それって随分高度な魔法じゃないの、と聞くと、  
「その魔法はたしかにコストが高いけど、燃費向上の特訓のおかげで仲間が来るまで保てたのよ。パウロも大きくなったらできるわよ」

どんな分野でも基礎の積み重ねが大事なのだ、としみじみ感じたものだった。

母のホウキに乗せてもらい、街の中心部へと向かう。ホウキがどのようにして揚力を得ているか観察したところ、風魔法で浮いて飛んでいるようだ。重力を軽減しているのかはまだわかっていないが、下から五十キロ近くの物体を浮かすほどの風が吹き上げているわけでも極端な初速で曲線運動しているわけでもないのは感覚で判明した。物理に携わる人間特有の思考を一旦中断し、改めて空中の風景を眺める。颯爽と吹き抜ける風と遠くまで見渡せる風景がいまっですすがしい。

「お母様、今日の天気は見事に晴れていますね」

「どうしたの、パウロ。さっきから他人行儀になっちゃって。どうしたの？」

「いえ、こういう爽やかな日はやはり散歩に限りますな。ああ、並木道をランニングするのもいいですね」

「…本当、急に大人びてどうしちゃったのかしら。私、そんなに厳しくしたつもりはないんだけど」

しばらく他愛ない雑談をしていると、目的の定期市に着いた。普段も商店街が開いているが、こういった日は近郊では見られない品物が並ぶので多くの人で賑わう。広場に降りると柑橘類の臭いが鼻をくすぐる。母が果物選びに悩んでいるようなので、私は手元のクウインチの実を母に見せた。

「お母様、この果物にしませんか」

「うん、それ結構渋くて硬いのよ。給仕のアシーナやセバスもお酒にするしかないって困ってるみたいで」

その話を聞いて私は花梨を思い出した。あれは生ではとても食べられないからジャムとかジュレにするはずだ。年を経るごとに甘党になつてきた私はお手製ジュレを友達に分けて、一緒にパンにつけて食べたものだ。

「その実の煮汁に砂糖を入れてゆっくり冷ますとおいしくできると本に書いていましたよ」

「やあ、坊主。ちっちゃいのによく知ってるな、えらいぞ。最近のわけーもんはクウインチの実を酒の実と思つてやがるからな」

つい定年手前になると、自分の趣味を増やしたくなるのは仕方がない。過酷な労働を長く生きていると、食べる事とか寝る事に幸せを実感するのだ。私は職業病と言える程凝り性なので、自然とそれらに一工夫入れたくなくなってしまう。それにジエンダーフリーの前世では、料理のできない男は男の風上にも置けない、という風習ができてしまっていたのにも起因する。

「料理は人間の最大の発明ですからね。覚えていて損はありません」母が随分冷や汗を流しているのを私は横目で飄々と笑った。

買い物も終えて広場まで戻る途中、文房具屋のショーウィンドウを見ると、設図器械一式が飾られていた。前世の若い頃、自費で買って死ぬまで使い続けたな、と思い出した。じーっと見つめていると、欲しいと伝わったのか、ガラスの反射ごしで困ったように母は私を見ていた。そのままずっと見続けると、観念して買ってくれた。母は製図セットをクレヨンセットと大差ないと考えたらしい。その道のプロとして紙に描き、パソコンにも描いてきた私としては、その認識に一喝したいところだったが、すぐに忘れてしまった。私の神器が再び手に入ったことで舞い上がっていたからだ。製図版とかどうやって運ぶんだ、と思っていたが、母は私と荷物をまとめて風

魔法でお手玉のように浮かして帰った。ここで実力を発揮するか、と少々驚いた。

「プレゼントの代わりに、いずれ私を越えてもらおう」と帰りにさりげなく爆弾発言をしてくれた母に私は戦々恐々だった。

私、何か気に障ることでもしたのだろうか、と悶々と考えたことを付け加えておく。

魔法には詠唱魔法と儀式魔法の二種類に大別される。詠唱魔法は、力ある言葉を決められた構文に基づいて唱えることで発動するもので、儀式魔法は、魔法発動媒体で魔法陣を描いて魔力を流して発動させるものだ。

魔法発動媒体『ソーサダイト』は魔力を一カ所に収束させる特殊な結晶で、上質なもののほど魔力を集めた時に色濃く輝く。通常、ソーサダイトは適当な大きさに切り出された後に収束率の最も高い形にカットイングされ、杖や指輪に装着する。道端の石もソーサダイトを含んでいるが、微量かつ不純物が多くて使い物にならず、シリンドロ最大級の火山、イグナ・ソドマで最高級が採掘できるそうだ。

魔力はこの世界に満ち溢れており、地形によっては島が浮いているそうだ。魔力の物理的法則に興味があったが、精霊との絡みがさっぱり想像できなかったので保留することにした。

製図セットを買ってもらってから数日、私は魔法陣を本の通りに描いて遊んでいた。産業革命手前の文明レベルでは、これも立派な遊びなのだ。あまりに暇だったので、かなり分厚い魔法辞典を漁り、正七角形とその外接円に何かの神話の言葉を綴った魔法陣を描いたところで、むくむくと発動させてみたい気分になった。製図セットにはペン先に小さな結晶がついており、収束量はどうしても小さくなるが魔法を発動できるようになっている。なるほど、被害がないようにするためにはかえって結晶が小さい方がいい。私自身も

目立たずに実験できるな、と安心してペン先に意識を集中した。意識を集中させて魔力を対象に集めることは誰でもできることだ。ペン先がぴくりと震え、ペン先が淡く光り始める。そのまま魔法陣に先端を向け、先端から魔法陣に魔力の川が流れるイメージをする。すでに魔力を他のものに流す作業は実践済みだ。魔力に反応して魔法陣が黄色に輝き始め、ペン先から青い電気が走る。理性より先に技師としての勘が警鐘を鳴らした。魔法陣を回路だと見立てると、放電現象が見られるのは非常にまずい。出力に問題があったか、と焦ったが、問題はそれどころではなかった。

魔法陣が宙に次々と現れ、さらに正十二面体を描くと縦横斜めに回転しながら巨大化し、屋敷全体に広がった。私が冷や汗を流している、空気がバチバチと音を立て、ニンニクみたいな異臭がする。その時、バタバタと音を立ててドアを破るように入ってきた三人、母マリーと執事セバスと給仕アシーナが尻餅をついている私を見つけている。窓の外では墨を流したような雲が屋敷を中心に急速に集まっていた。母は何も言わず、二人に目配せすると、三人は杖を取り出し、呪文を紡ぎ出す。

『嗚呼、主神ズーラスよ。御力を我等に与え給へ。其は全能の楯。我等が捧ぐは我等の血。』

暗雲が私の真上で台風のように渦巻き、中心の目が青く光る。

『アイジスの楯！！』

三人が一寸もずれることなく唱えた直後、杖から赤い球が飛び出し、窓をくぐって屋根の上ではぜる。屋敷をモザイクガラスみたいな赤い光が覆ってしばらくして、巨人の雷腕がガンと落ちてきた。床が縦に振動したが雷に焼かれることはなく、十秒ほどで揺れが収まった。赤い楯がゆっくりと消えていき、三人が杖を構えたまま何かを警戒している。元凶が黙っているのもまずいと思い、恐る恐る母に話しかけた。

「あゝ、お母様。もう大丈夫ですよ」

「わからないわ。第二波がくるかもしれない」

「仰る通りです。私見では、犯人は複数犯による暗殺かと。あれは一撃で下位竜種を葬るほどの威力でした。陽動の一撃を撃った後、手練れならばここに乗り込んでくるでしょう」

「マリー様、坊ちやま、ご安心を。私めが身命に賭けてもお守り致します」

「私達だ」

「あら、ご老人に出番はないわ。私ひとりで十分です」

「ぬかせ。老骨の意地を目にも見せて進ぜよう」

私は魔法を安易に使用してしまった事を後悔した。ここまで迷惑をかけてしまい、命まで助けてもらってしまった。事故を起こした張本人が責任者に黙って見逃してもらおう、なんて思考は恥の上塗りだ。私は物理的に首が切られる覚悟で正座をし、深く三人に詫びた。

「お母様、バトラー、アシーナ。魔法を勝手に使い申し訳ありませんでした」

深く土下座を敢行する私を見て三人は戸惑いを隠せない。あれほ

どの魔法を三歳が発動できるはずがない、と顔が語っていた。

「坊ちやまは何も落ち度はございません。事前に危険分子を排除できなかつたせいです。ご自身を責めぬよう」

「いいえ、私が招いたことです。ここに私が発動させた魔方陣の跡があります」

「…認めるわ。でも、パウロ。どうして魔法を使おうと思ったの？」  
「興味があつたからです。そして、ペンについているソーサダイトの量から魔法を発動させる際に問題はない、と甘い判断をしてしまいました」

危づく自分だけではなく何人も命を失うところでした。家を追放されても文句は言いません。罰は甘んじて受けます、と頭を垂れた。

この姿勢からでは母の顔は見えない。どれほど複雑な心境だろうか。

長い、長い沈黙の後、母は顔を上げるように、と言った。母の目は髪影に隠れてよく見えなかったが、声が少し震えていた。

「失敗した理由がわかっていながら今回は許すわ。でも、次からは絶対に危ないことは甘い判断でしないで頂戴」

「はい。二度とこのような事はいたしません」

「お父様が帰つたらもう一度話すわ。いいわね」

私は黙って頷いた。

「ハツハツハツ、曲がりなりにも『雷神の右腕』を発動させるなんてすごいじゃないか、パウロ」

「笑いごとではありませんよ。もう少しで家が消滅するところでしたのよ？」

「ふむ、まあ結果オーライだ。これを機に家庭教師を雇うか」

「ええ、是非そうしてくださいな。ところでパウロ」

目の前にある食卓の溶け落ちる蠟のように汗が流れた。

「はい、何でしょうか」

「あなたが十歳になったら、魔法学院に入れるわ」

プランジヤで魔法学院といえば、この都市国家が築かれる礎となったプランジヤ魔法学院を指す。七年全寮制で十になれば、魔法を学ぶために多くの子供たちが入学する。その学院は最高峰だけあって、かなり進級条件が厳しいといわれている。故に、その魔法学院を無事に卒業できる事は名誉な事とされている。

「ですが、お母様。私はまだ魔法を上手く使えません。このままだと学院に入っても他の人をケガさせそうです」

「そうよね。だから、明日からパウロに魔法を覚えてくれる先生を呼んであげるわ」

「明日？」

「ええ、そうよ。もしかしたら、パウロは祝福持ちかもしれないし」

明日から家庭教師が来ることに驚いたが、私が聞いたこともな

い単語が出てきたことで更に驚く。

「祝福つて何？」

「ギフトって一般的に呼ばれてるわ。いろんな神様や精霊の中の一人が人間に様々な力を与えてくれるのよ」

私は火の上位精霊のギフトよ、と母は付け加えた。精霊や神に選ばれる基準が判明できておらず、幼少の頃に発現する。効果は位階が高い程強力になる。しかし、その分制御が難しく、暴走して大怪我をする人間も過去にいたようだ。

「ギフトはすぐに発見できるのですか」

「その専用の道具があつて、パウロに因子があるかどうかわかるのよ」

後で調べた所、ギフトが発現する因子があつて、種類によって因子から出てくる波の形が違うらしい。

発現前は微弱で発現後は段違いに波の強さが上がるとか。

「わかりました。明日、楽しみにしていますね」

父トマスが何か言いたそうにしていたが、父に向ける母の目が『黙ってる。』と言わんばかりだったので、ついに話さなかった。

自室の縦長の鏡を見て、一人思案に暮れる。父親に似た黒髪の顔立ちに母親譲りの藍色の目。何の表情もない今の私は人形のようにだ。

そう、まるで私の心を入れている人形だ。前世への想いはなかなか

か断ち切れず、憂鬱な思考にはまってしまう。私は何を目指して生きようか。私はこの世界で何ができるのだろうか。

考えすぎるな、と自分を叱り飛ばすと窓から青白い月が見えた。優しく照らす天の眼差しを見つめ返すと、すっかり元通りになった気がした。

そうだ、自分にはこの世界で誰よりも技術的な知識を持っている。誰よりも機械に携わっている。そして、誰よりも物作りが好きだ。気持ちが落ち着いてきたところで明日の家庭教師を楽しみにするとした。そのおかげか、私は割とすぐに深い眠りに入っていた。

次の日、朝食をとる前に一人でそこそこ上質な服を着る。本当は活動しやすい落ち着いた服を着たいが、今日は大事なお客が初めて来る日だ。失礼のないようにしないといけない。

「お早うございます。坊ちやま。おや、もうお着替えになられましたか」

「そうだセバス、いや、今はバトラーか。これから自分でできる事は自分でやるよ。ボクは貴族の息子ではないからね。靴の紐も結べない人間にはなりたくないのさ」

「わかりました、善処致します。では、こちらを」

暗赤色の液体がガラスの筒状のポットに氷と一緒に入っている。

「アーミン茶でございます。朝の眠気覚ましに効きます」

注がれたカップに口をつけると、ほんのりと爽やかな苦味が広がる。

「このお茶、おいしいな。すつきりするよ」

「ありがとうございます。それでは私は朝食の支度に入りますので失礼します」

「待て。バトラーは家庭教師のプロフィールを教えてくださいるか」

整った銀系の髪をさらっと流して、主の方を向いた。

「そうですね。今は魔法の熟練者で少々変わった方、とだけ申し上げましょう」

「そうか、お母様の指示か」

コクリとうなずいた後、バトラーは静かに出て行った。

真昼にさしかかった時に彼が来た。玄関には鰐広の灰色帽子に薄い生地で縫われた焦げ茶色のマント、暖かさとお老獪さを含んだエメ

ラルドの瞳を持った老人が立っていた。帽子を取り、辺りをぐるりと見回した後、私の方へゆっくりと会釈した。

「初めましてじゃな。君に色々教えることになったハントシャル・カトラスじゃ」

「パウロ・ディラックです。こちらこそよろしくお願いします」

握手をすると同時に、彼のマントにうつすら幾何学模様が浮かんでいるのが見えた。

「……。なかなか面白い過ごし方をしておったようじゃな」

「マントに魔法陣を仕込むとは流石ですね。後で仕組みを教えてくださいますか」

ハントシャルは慌てて手を離そうとしたが、私はグッと握って離さない。初対面に頭の中を覗こうとするとは良い度胸じゃないか。ハントシャルは魔法を解除し、残った左手で降参のポーズを取った。「ああ、三才のガキと思って油断したわい。まさかマントに織り込んだ『魔導繊維』を見破られるとは思ってもよらなんだ。パウロ坊や、あれが見えたのかい？」

私が答える前に、母が腰に手を当てて不機嫌な顔で話しかけた。

「ちよつと、私に先に挨拶せずにいきなりパウロに解錠魔法を使うのは無礼すぎませんか？」

「ほほほ、失礼した。ここは老人の耄碌だとしておけんかの」

「はあ、シャルの事はよく知ってたけど、やっぱり慣れないわ。絶対友人少ないでしょう」

「天涯孤独は素晴らしいではないか。とはいえ、ワシはこれでも顔が広いのじゃがな」

「…もういいわ。とにかくパウロに魔法を教えて頂戴。報酬は全額前払いしておくわ」

「良いのか。トングズラするかも知れぬぞ」

「あなたに限ってそんな事できっこないでしょう。それと私の夫の職業知ってる？」

「ふふん、客に茶の一杯も出さないのがこの家の礼儀かの」

ちょうど良いタイミングでアシーナが現れた。

「ハントシャル様、奥様、坊ちやま。お茶の用意ができました」

「ねっ、シャル。私の手際を舐めないでほしいわね」

「そうじゃな、次からここを喫茶店にするとよい。八年前のお主とは思えんぞい」

「あゝ、その性格がなければ今頃学園長とか宮廷魔術師になっていただろうに」

「ワシは根無し草の方が性に合っておるわい。さて、茶が冷めぬ内に飲もうか」

少し会話をさせておくだけでこれだ。だが、左巻きの性格に興味を覚えた。面白い。魔法とやらをこの偏屈老人から学んでやろうじやないか。意気揚々と応接間に足を運んだのであった。

お茶をしている間、私はハントシャルとおしゃべりを楽しんだ。

「ハントシャル先生はどのような職業をなさっているのですか」

「ワシはカムシャフのあらゆる場所を旅しておつての。現地で領主に九の助言と一の苦言を申し上げたり、飢餓といった問題を解決するために農作物の栽培方法を教えたりとおつてな。お金は最低限だけもらって、後は現地の食料とか衣服、時には魔法具をもらっ

たりして生計をたてておる」

話を聞くと随分聞こえの良い老人に見える。いや、違う。そんな美談しか持っていないはずがない。

「あそこに掛けているマント、随分と着古していますね。十年は着続けないとあはなりませんよ。もらった衣服とかはどうしているのですか」

「そうじゃの。次の村の者たちにあげたりしておる。あとは」  
「魔法具に改造して商人に高く売りつけたりとか」

「ご老人、随分目をむいていらつしやる。そんなに驚くことだろうか。むしろ魔法使いなら当たり前の考えだと思う。」

「ぬぬ。さつきから驚かされっぱなしじゃわ。マリー、この坊やをどう育てたらこうなるのじゃ。まるで抜け目のない大人と話しておるようじゃ」

はい、私ことミノル・オオツキは抜け目のない大人であります。

「私はそこまで意識して育てたことはないけれどね。せいぜい食事の仕方とか礼儀作法程度しか躡けた位かな」

「ふむ、そういうことにしておくかの」

老人は静かにカップを下ろし、私に向き直る。その瞳の奥に写すのは外見の私か、それとも中身の私か。どうも彼を見ていると心の内まで見透かされているような感覚に陥る。先に口火を切ったのはハントシャルだった。

「さて、これから魔法を教えようと思うのじゃが、まずはギフト持

ちかどうか調べねばならん」  
ハントシャルはパチンと指をならして、掛けてあった帽子を手元に呼び出し、帽子の中から人の頭大の水晶球を取り出した。ホウキを飛ばす以上に不思議現象を目の当たりにし、肩をビクツとしてしまった。さすがに質量保存の常識が破られるとは思わなかった。  
「では、これに両手をおいてごらん」

ゆつくりと手をおくと、水晶は氷のようにひんやりとしていた。しばらくすると、水晶の中で煙のようなものがうずまき、象形文字のようなものをかたどった。ハントシャルは眉をあげて、「これは……。ふうむ。なるほどなるほど……。」とぶつぶつ呟いている。  
「先生、何かわかりましたか」  
「うむ、驚くでないぞ。坊やはもうギフトが目覚めておる」

母が真剣に先を言うよう、うなずいた。  
「坊やは『ミネルヴァの祝福』を授かっている」  
母は口を押さえて驚いていたが、まだギフトに詳しくない私は首をかしげる。  
老人はイタズラがうまくいったような笑みを浮かべていた。

「つまり、どんなものなんでしょうか」

「うむ、マリーから聞いておるかもしれんじやろうがギフト、すなわち祝福は下位・中位・上位精霊と神話上の神から与えられるものじゃ。ギフト自体は珍しくはないぞ。下位はプラウジャ全人口の四割、中位は二割、上位は一割ほどおる。しかし、その精霊の祝福とは一線画するものがある。それが神の祝福じゃ。国内外問わず、そうそう発現する者はいないのだが、その効果は絶大で国家財産になるほどのじゃ」

「もう少し具体的に？」

「ふむ、どこであつたか……。おお、二年前にシリンド帝王の一人娘が目覚めたのを覚えておる。たしか『アルテナの祝福』での、戦争で戦えば一騎当千右に出る者がなく、さらに戦場に居るだけで味方の軍の損耗率を減少させ、戦闘力を全体強化するというものじゃ」

なんか一昔のゲームにそんな奴がいた気がする。一回のコンボで敵が百人単位で吹き飛ばす様が爽快なのだが、現実であれが起こったら修羅か悪鬼か般若の類に見られるだろう。悪夢以外の何者でもない。

「それは凄まじいですね。戦略兵器と言つて良いのでは」

「確かに兵器と言つてよからう。皇女も初めは裏で道具扱いされかけおつたが、現皇帝がそれを逆手にとつて反対勢力を一気に掃除してもうてな。最後に皇女に会つた時は輝かんほどに明るくなつておつた」

アシーナが新しく注いだお茶を母が軽く飲むと、気がかりな点を

尋ねた。

「じゃあ、パウロは大丈夫なのかしら。どういった対策をとればいいのか?」

「ひとまず坊やのギフトは入学するまでは伏せておくことじゃ。他の者に知られれば命を狙われるやもしれぬ。あと、こうしておこう」

今度はハントシャルの長く蓄えた白いあご鬚が、仄かに青白く光った。私もそんな光に包まれ、適当な空調が効いた部屋に入った感じがした。

「ひげについては呆れてものも言えませんが、何をなさったのですか?」

「ほほほ、実は付け鬚なのじゃよ。坊やにはおまじないをかけておいた。万が一のために、慎重にしすぎることはない」

それは分野を問わず言えることだろう。普通は有り得ないと思っ  
てしまう事態を想定して行動するのは、リスクを低くするために必  
要な最低限の行為だ。前世でも、およそ三世紀前に想定外の自然災  
害で原発が吹き飛び、マニュアルを考えていなかった政府が情報の  
錯綜にあたふたして行動が遅れ、結果として史上最悪の放射能汚染  
事故を引き起こしてしまった。私がエレメンタリー・スクールに通  
っていた頃、それが電子教科書に載っていたのを思い出した。あれ  
から私の国は、さらに綿密で周到な開発計画と迅速を極めた命令系  
統再編に心血を注ぎ、他国の追随を許さない科学立国の黄金期を築  
き上げた。この老人は危機管理が行き届いた人だ。信頼できる、と  
私は感じた。

「ありがとうございます。それで、『ミネルヴァの祝福』とは一体

「？」

「んっ、話がそれておつたの。実はよくわからんのじゃ」

「どういうことですか？」

「さっき言ったように、神のギフトは発現が歴史的に非常に稀じゃ。百年に一人いればいいところ。それゆえに神のギフトを記した文献がほとんどなくての。昔の詳しい文献はもう戦火に燃え尽きたか、散逸してしまったのじゃ。ミネルヴァは技芸の神じゃから、おそらく技術的に特異な能力であるのは間違いない。が、それ以上はよくわからん」

つまり、この老人からは神のギフトの制御はきつちりとは学べないということ。ならば、彼の豊富な経験を生かして制御法を模索するのがベスト。神のギフトは百年来のレア物と考えると、私の付加価値は相当高いものになる。学者気質のある魔法使いなら、のどから手が出るほどだろう。まだ私を売り込める余地があるのではないかと私は考えた。

「そうですね、残念です。では、先生は益々利点がありますね」

意図がわからないといった風に老人は目を細めた。

「どういう意味かの」

「簡単な話ですよ。私は先生に大金を出して魔法の真髄を教えてください、先生は私のギフトを研究する権利を七年も独占できる。そちらにはおもしろすぎるのではないかな、と」

「パウロ、口を慎みなさい。これからお世話になる人にかける言葉ではありません」

「…麒麟児とはごうい子指すやもしれんの。マリー、授業料は三割引きにする」

「ですけど」

「良い、これもこの子の才覚じゃ。じゃが、坊や」

心配と興味を緋い交ぜにした表情でハントシャルは言った。

「自分を交渉材料にする考えは今回限りじゃ。それは交渉相手が善人であるのを前提としておるからの、賢い坊やならわかっておるだろう。世の中は単なる悪よりも恐ろしいものがあるという事をの」

世の中を利益と損失だけで天秤にかけ、金と物の流れから利益を搾り取る化物商人相手では、こうは上手くいくまい。それは前世から重々知っている。

「肝に銘じておきます」

「ほほ、まあワシも今日は久しぶりに話ができてよかったわい。では、お暇する前にほれ」

ハントシャルが親指で何かを弾いて、私の手元に渡した。真珠大のソーサダイトがはめ込まれた指輪であった。

「いずれその指に収めることができるじゃろう」

こうしてハントシャルとの初邂逅は幕を閉じた。

## 登場人物紹介

時点：プランジヤ魔法学院入学前

パウロ・ディラック

黒髪に藍色の目をした美少年。セバス曰く、お茶を少し含んだ後に見せる物憂げな表情が一枚の絵になる、との事。不慮の事故で前世から転生してきた。物を作ることが好きで好きでたまらない。前世の年齢を加味した思考をする。つまり心はオッサン。ちなみに前世の趣味はヴァイオリンである。

> i 2 5 7 6 6 — 3 3 6 3 <

トマス・ディラック

パウロの父親で職業は大使。公は実直、プライベートは温和な人格をしている。パウロに何かと構いたがるのだが、マリーに睨まれる。

マリー・ディラック

パウロの母親で元軍人。強力な戦闘力を持ち、ドラゴンを撃退した事件以来『火刑のマリー』と呼ばれるようになった。パウロに礼儀は厳しく躰けるも、基本的に優しく接する。つまり、パウロにぞっ

こん。パウロとの時間を盗られるのはトマスでも渋る。トマスが二人の時間を作れなくてしょげているのを彼女は知らない。

ハントシャル・カトラス

ズケズケ正論の嫌味を言う偏屈放浪魔法使い。だが正論で的確な助言は各国で重宝されている。雰囲気はまさに老魔法使いそのもの。髪は灰色、目はエメラルド色をしている。パウロに対して、家庭教師としても魔法使いとしても非常に興味を持っている。パウロを精神年齢加味でつきあってくれる数少ない人間である。

セバスチャン・クランマー

老年に入りつつあるディラック家の執事<sup>パトライ</sup>。仕事をしている間は完璧な銀髪黒目の紳士で、料理や掃除、庭の剪定から戦闘、果ては暗殺までそつなくこなす。プライベートになると、省エネモードに入り三等身になる。種族は不明。

アシーナ・クロムウエル

先代から仕えるディラック家の給仕。見た目は二十台前半の金髪娘。目は茶色である。普段はセバスの補佐をしている。パウロの世話がかからないことで給料カットされるかも、と素朴な心配をしたりする。セバスと同様、魔法に関してはマリーにもう少しで並ぶ程優秀。種族は長寿のニンフ。

時刻 一二五、シリンド帝国宮殿。夜闇の中で薄緑色のライトアップに照らされた石組みの壁は、堅牢さと王家の威厳を無言で語っていた。陸は人間や獣人の兵士が、空は翼を持った魔族の兵士が巡回し目を光らせている。素人目では巡回パターンに隙がないように感じられる。

だが、それをかいくぐろうとする男達がいた。服装は全て黒ずくめで、武器の類まで黒塗りで反射を抑える用心までしている。雰囲気はさしずめ忍者といったところだろう。彼らは『塵気楼』、連邦に所属する悪名高い傭兵団である。彼らが受ける依頼内容は、主に諜報と暗殺で、時折密輸もする。今回は団の中でも選り抜きのメンバーを揃えてきた。下っ端には荷が重過ぎるからである。

依頼内容は『シリンド帝国第一皇女イザベル・アナスチュワート・シリンドの暗殺』。初め、俺達はその依頼を断ろうとした。提示された報酬にしてはあまりにリスクの高い依頼だったからだ。依頼人は仲介屋と名乗り、一度帰らせてから仲介屋を調べても第二第三の仲介屋が芽づるで現れる始末。よほど素性を辿られたくないのだろうか、そこで最初に提示された報酬の三倍をふっかけた。十人が十年は遊んで暮らせる金額だが、それを仲介屋はさらっとOKしてくれた。さらに依頼人の姿がはつきりしてくる。これは個人の依頼ではなく組織、おそらく政府の依頼なのだろう、と。これまで依頼達成率を八割台にキープしてきた俺達はプロの矜持にかけて依頼を受けることにした。断れば政府に睨まれて、おそらく社会的に抹殺しにくるに違いない。それよりは、危険を承知で暗殺をし、大金

を手に入れればいい。帝国に追われるだろうが、俺達は隠密のプロだから逃げ切れる自信はある。

依頼の理由を尋ねても仲介屋は私知りません、の一点張りだった。だが仮に政府が依頼主だと仮定すると、だいたい想像がつくというものだ。現在、連邦は帝国の宥和政策によって、若干の土地をもらう代わりに侵攻を停めているのだが、帝国に神のギフト持ちが生まれてしまったことで危機感を抱いている。

それも、御伽噺で有名な英雄シグルスと同じ、戦争と勝利の神アルテナのギフトとなると恐怖で政治家達は朝食を戻してしまっただろう。枕を高くして眠ることに執着するあいつらは、国の災禍になる芽を一刻も早く摘むことにした。で、そのお鉢が俺達に回ってきた、というわけだ。

まあ、気持ちにはわからなくもない。自分の隣の家が人食い虎を飼っていたとしよう。

そんな奴の隣で安心して生活できるはずがない。そこで保健所に頼んだわけだ。

「あれを消してくれ。そのうち殺されそうだ」

見合った金さえ出してくれば俺達はニコニコと承諾する。依頼人も悩みが消えてニコニコできる。

そこに何も問題はない。虎の感情？知ったことではない。そいつがまだ五歳であろうがドレスを着ていようが虎は虎。そこに会話は成立しえないのだ。だから、この依頼はノープロブレム。俺達には一切罪悪感はない。

目をつぶって思考にふけっていると、横から副長にこづかれた。

「これから仕事だぞ。何をのうのうと寝ている」

「すまん、見取り図を頭で確認していてな」

「ならいいんだが。状況開始まで残り一分だ」

「よし、これから『ブリュンヒルト作戦』を決行する。作戦内容はもうわかっているな」

居並ぶ全員が「了」と答えた。

「目標離脱時間は十分だ。限界滞在時間は二十分、これを過ぎれば任務を失敗しても退却しろ」

「了」

「三…二…一…開始」

俺と副官以外の八人は、警備の交代時の一瞬の隙に十メートルはある石壁をジャンプして越えていった。警備についている兵士をひきつけるための陽動だ。隠密性と機動性に特化した彼らなら、兵士に気づかれずに皇女の寝室までたどり着くことはできるだろう。無論、寝室はおそらく空になることは予想済み。寝室内の脱出口が宮殿外の廃屋に通ずるのを環境調査で発見したのだ。今回の作戦はそれを利用する。つまり、兎の穴から顔をだしたところを狙う。対象は訳がわからないといった表情で死ぬだろう。

右耳から無線魔法具がザアザアとうなる。最新の魔法具だが、音量と距離が反比例するのがネックだ。

『千鳥より楓へ、観測地点に到達した。戦闘行為はあったが、損耗は無し。まだ敵には気づかれていない』

「楓より千鳥へ、そのまま待機。集結状況が黄から赤に移行した後、報告せよ」

『柎より楓へ、戦闘行為は現在無し。目標地点へ順調に進んでいる。損耗は無し』

「楓より柎へ、目標地点の状況を確認した後、SPならば速やかに離脱せよ。DPならば対象を抹殺せよ」

俺達も廃屋にたどり着き、床の隠し扉に意識を向けた。哨戒班、陽動班共に機能している。後は、兎が穴に潜るかどうか。それからの沈黙の一分二七秒は俺の胃をギリギリと締め付けた。副長も短刀の柄を握ったり離したりしている。そして、俄かに右耳が騒がしくなった。

『千鳥より楓へ、兵士の集結地点がおかしい。状況が赤に移っても奴らは目標地点に向かっていない』

「楓より千鳥へ、集結地点はどこだ」

『千鳥より楓へ、奴らは外周の、がああああアアッ。……ザアアアアアア』

「千鳥、どうした」

『松より楓！！皇女と交戦状態だ！！チクショウ、振り切れない。損耗は二』

「全部隊、終結地点まで退避することを優先しろ。状況をTPとばしてFPに移行する」

『柎より楓へ、宮廷魔術師と交戦状態に入った。やはり罠だ、待ち伏せされていた』

積極交戦は避ける、と指示を出した時に俺達は気づいた。街が異様に静かだ。金属がジャツジャツと規則正しく音を立てている。だんだんこちらに近づいてきているようだ。副官と目配せをして終結地点に移動しようとした時、

『あーあー、もしもし。聞こえるか。妾は第一皇女イザベルじゃ』



「現刻をもって任務は失敗とする。自決なり何なり好きにしろ」

副官は音もなく倒れた。俺も奥歯に仕込んだ毒針をかむ。視界が虹色に染まり、意識が遠のいていった。

ほかほかと暖かい郊外の草原でハントシャルの授業が始まった。緩やかな丘の坂に二人で並んで座り、話し始める。

「それではワシの授業を受けるに当たって気をつけて欲しいことがある。ワシは学園の教える表面的な魔法を教えるつもりはない。つまり、呪文はほとんど教えぬ」

いきなり授業方針から来たか。それに異論はない。呪文を知りたければ、極端な話、辞書でも引けば事足りると思うからだ。

「はい」

「坊やには魔法の制御能力が人一倍必要じゃ。こないだのように、己の魔法で自滅してしまうじゃろうからの」

まだ原因はきっちり判明していないが、あれが発動したのはギフトが関係していると考えるのは妥当だ。ハントシャルの指摘が正しいと私は確認して頷いた。

「そこで、ワシは魔法の中で最も基本の『魔力操作』を坊やに極めてもらおう、と思っておる。坊やには神のギフトを抜きにしても素質がある。マントの中の魔力の流れが見えたであろう。あの時感じたのじゃ。この子には教え甲斐がありそうだ、とな」

「でも、なんで『魔力操作』だけ何ですか。他にも基礎魔法とかあるのに」

世の中には火、水、風、土、雷の基礎魔法があり、それらを正確に発動させる事が魔法使いの最初の関門だ、といくつもの本に書いていた。一方、魔力操作は魔法というより、魔法を発動させるための過程とみなされている。

「理由の〜。そのまま言葉にするのは難しい。んっ、そうじゃな、音楽に例えるでしょうか。曲は小節に、小節は音に分かれるじゃろ。その一音の中も実は表と裏の拍に別れるのじゃ。その拍一つ一つを意識的に奏でる操作を魔力操作と呼ぶ。拍を意識した音は洗練された一小節の円を描き、真円を描いた小節は魔法の一曲を形作るのじゃな。ワシの経験からして、これが並みの魔法使いの上をいく最短のステップじゃと思っておる」

すごく遠回しな言い方だが、要は基本が大事と言いたいのだ。前世でも基本を疎かにしてしまった英語は成績が惨憺たる結果だったのを思い出して苦笑した。

「その魔法の一曲ってどんな魔法なの？」

我ながら気の利いた子供の疑問だと思った。

「ほほほ、決まっておる。皆を虜にする魅惑の魔法じゃよ」

それから練習用の杖を貸してもらい、ハントシャルの言う通りに魔力の流れを掴む練習をずっとした。

練習風景は前世で歴史の電子教科書に載ってた、CG映画の黎明期作品として有名な『星間戦争』の見習い騎士の修行にかなり似ている。数時間後、目をつぶって周りの魔力の流れを意識的に若干動かせるようになった所でハントシャルがストップをかけた。

「そこまでじゃ。やはり神のギフトは桁違いじゃな。たかだか三時間魔力をわずかにでも操作できるとはの」

「あまり出来たような気がしません」

「そうではない。ワシが魔力を意識的に操作できるようにするまで二十年かかったわい。最初の一年はピクリとも動かなんだ」  
「意識して動かすのは無意識とそんなに違うのですか」

ハントシャルは懐の長い杖の装飾部分でボクンと私の頭を叩いた。重力に乗せているので結構痛い。

「無意識の魔力で魔法を発動すれば、質の粗い魔法になる。意識的にやったのでは大違いじゃ」

「痛いです。なんで叩くんですか」

「阿呆、同じ説明は二度も要らぬ。理解したらそれでよい」

三才にも容赦ないが、それだけ本気なのだろう。そして、ハントシャルの本気をいざれ見てみたい。私はこうして何年もハントシャルの背を追いかけていった。

## Section・9 (前書き)

専門的なツツコミはなし、の方向でお願いします。  
なんか急成長してますが、本人の学習能力の賜物としておいでください。

夏、秋、冬、春と季節は移ろい、一年の巡りも五回過ぎす間、私は子供として健康的な日常とハントシャルとの魔法の授業を両立する多忙な日々を送った。適度な負荷は肉体に良い影響を与えると聞くが、初めは目一杯遊んだ後に地味で神経を使う魔法の授業を受けると死んだように眠った。

それでもめげずに時間を見つけては製図を描き続けた。今描いている作品は反射望遠鏡だ。反射望遠鏡は対物鏡に凹面反射鏡を用いたもので、凹面鏡にはパラボロイドという特殊な形状にする。ガラスの表面に銀やアルミニウムの薄膜をかぶせて入射光を反射させ、斜鏡で接眼レンズに像を到達させて拡大させる。これの利点は、光軸に平行に入射した光線は収差、つまり像がぼけたり歪んだり縁に色がついたりすることなしに焦点に集まることだ。レンズを通して物体の像を結ばせようとすると、光の波長によってガラスの屈折率が違うために、物体の色によって像の位置がずれてしまう。これを除去するために数枚のレンズを組み合わせるのだが、海賊の船長が持っているようにやけに長くなってしまふ。そこで、この望遠鏡を使うことで全長が短いまま遠い場所まで見ることができるようだ。それでもあまり視野を広くとれず、口径比も大きくとれないが、補正板を組み合わせることで解決するだろう。

ふと作業を止めて自分の手を見ると、割と大きくなったことに気づいた。だが、まだペンだこも皺もない綺麗で手入れの行き届いた指だった。まだまだだな、と思いつつ窓を開けると爽やかな風が私の頬を撫でた。もう八歳になった私は随分背が伸びた。目線も脚立

なしに窓の外を見渡すことができることに小さな達成感を感じていた。

窓でぼうつとしてしていると、遠くに鰐広の老人が見える。今日も杖を持って地面を踏みしめてやってくる。なんで飛んでこないのか訊いてみた所、「風情がない」と返してきた。本当によくわからない人だ、と思ったが、言っても変わらないのはしばらくの付き合いでわかったことだ。もう突っ込むつもりもない。

ハントシャルと玄関で落ち合い、そのまま付近の林の開けた所に着いた。もらった指輪は最近なんとか嵌めることができるようになった。老人と向き合って、すぐに慣れ親しんだ魔力操作の練習に入る。目をつぶり、精密作業をする状況を思い出し、精神を極度の集中に沈める。心は明鏡止水の域に入り、周囲の魔力の流れを感じる。乱雑な流れを自分の周りだけ渦を巻くようにして安定させる。自分の意志を魔力収束にこめ、流れ込む流れを一滴ずつ最適の条件で指輪に収束させる。指輪が眩いばかりに輝いた後、ハントシャルが口を開いた。

「そう、そうじゃ。今日はそのままワシが教えた魔法を出来るだけ長く発動させるのじゃ」

この五年間で教えてもらった魔法は基礎魔法とバリアのみ。だが私は黙って全ての呪文を同時に発動させた。全身にぴったりと淡い緑色と黄色のシールドが覆い、胴の周りを火と水と風と雷の玉がゆつくりと回っている。しばらくハントシャルがその魔法の様子を見つめ、にやりと微笑んだ。

「やはりの。坊やのギフトの能力の本質は技能の習得、技量の上達

に関係がありそうじゃない。全くムラのない魔法が発動できておる」

だが、今日はハントシャルをあっと言わせようと思っている。私は意地の悪い笑顔で腕を組んだ。

「今日は先生に僕の五年間のギフト研究の成果を見てもらいたいです。よろしいですか？」

「ほう、面白いの。もしか手からキャンデーが出てくるのかの？」  
「キャンデーよりは素晴らしいと約束しますよ」

指輪を填めている指をすつと念じながら横に振ると発動していた魔法が宙に浮かぶ魔法陣に変化する。

『構成変更、合成』

胸の手前に集まった魔法陣を両手で直接触れると、頭の命令通りに魔法陣の構成が変化し、魔法陣同士が結合し一つの新しい陣になる。複雑になってきた魔法陣群が特定の記号列に変化し、別の魔法陣に格納される。自分がかつて失敗した魔法の構成を少し弄ったものにし、発動命令を出す。

『雷神の右腕改 双籠手』

私の両肘から指先まで雷が纏われ、青白く発光している。ハントシャルの方を見ると、目をしばたかせて目の前の現象を疑っているよ

うだ。

「このような事があり得るのか。発動させている詠唱魔法を魔法陣に還元して、あまつさえ陣の構成を変更してしまう等、見たことも聞いたこともないぞい。」

「そうですね。ボクもこれを発見した時は驚きましたよ。でも、これを物にするまでもものすごく時間がかかりましたね。魔法陣を変更させる際に、すごく繊細な魔力操作が必要なんです。やっぱり先生の教えは正しかったですね。」

近くの木へ歩いていき、軽く右手で木をノックすると木がバチバチと火花を上げてあつという間に炭化する。残りの左手をさつと明後日の方向に振りぬくと、雷球がズガガガと木を吹き飛ばしながら林をしばらく突き進んでいった。それをハントシヤルは啞然として見ていた。イタズラが決まったかのように、私はニヤリと笑った。

section・9 (後書き)

最近流行の座右の銘メーカー。  
ちよつと試してみた。

パウロ

「臆病者は成功者に成り得ぬ。」  
達観してますね。

ハントシャル

「お代は君の笑顔で十分さ」  
怪しすぎる。裏がありそうだ。

イザベル

「時に友情より恋を取る。」  
…その展開は読めなかった。

マリー

「ギリギリ人間のライン」  
まさしく。

トマス

「少しでも得したい。」  
生きるうえで必要な考えですね。正直です。

セバス

「信用だけは金では買えない。」  
執事は信用が第一。的を得ています。

アシーナ

「泥河に磨けば光る石がある」

大丈夫です。まだ出番はあります。安心してください。

その日、ハントシャルとの授業はそこでお開きとなり、ハントシャルは調べたいことがあるからしばらく留守にする、と言ってホウキで飛んでいってしまった。風情を置き忘れる程のものだったのだろうか、まあギフトの解明につながるなら一向に構わないのだが、と私はぼんやりと遙か彼方の青空を眺めた。

あくる夏の日、いつものように近所の子どもと一緒に遊んでいた。郊外は緑が多いほうで、外遊びに飽きることはない。追いかけて、かくれんぼ、花摘み、虫捕り、草笛と挙げればきりがないほどだ。

「おい、パウロ。次は何して遊ぶ？」

「え〜と…、わたし、花飾り作りたい」

今ここにいるのは、私とアンドリユーとダイアーネの三人だ。二人の姓はオーウェル、あだ名はアンディーとディーだ。兄妹にしては仲がいいな、と私は感心している。前世の経験上、兄弟姉妹で良好な関係を築いていた人達は少なかった。それも、年を重ねて疎遠になればなるほど、全員ではないがギスギスしていたものを感じていた。この二人はいつまでも仲が良くありますように、と心の片隅で祈りながら、思考の大半を次の遊びの選定に費やした。

「今日は魔法を使ってみようか」

「よし、今度こそパウロを抜いてやる」

「そうね。私達も負けられないわ。パウロ君上手すぎるし」

淡い栗色の髪をアンディーは首までばさりとおろし、ディーは肩で切りそろえてこめかみ辺りの髪を三つ編みに結って、後ろで一つに纏めている。二人はとがった耳と白磁の肌、くりつとまん丸とした蒼

い月の瞳を持ち、どちらも明るい性格をしている。この双子の容貌には思わず将来を楽しみにしてしまう。それ程美しいエルフであった。

カムシャフに最初に生を受けたと言われるエルフは長命で老いることがなく、総じて身体能力、魔法制御能力ともにハイクラスに位置する種族だ。その中でもレンドリアンの森に住むエルフはハイエルフと呼ばれ、始祖の血を継ぐ者達のみが使える秘儀があるのかないとか。

この二人はハイエルフではないにせよ、凄まじい才能を持っているのは確かだ。ハントシャルの受け売りでたまに魔法を教えることになってから三年間、雨後の筍のごとく二人は制御能力を磨いていった。父の書斎から魔法辞典を借りてから、使えそうで安全そうな魔法を三人でこっそり試してみるのが遊びとして定着していった。

「じゃあ、今日は水属性にしよう。一番綺麗な技の出し合いっこだ」「えっ！？パウロはいいの？わたし水の上位だよ」

デイーは目をぱちくりと開けて確認してきた。デイーは水、アンデイは風の上位だ。精霊のギフトは多様な方向性から一言では表せないのだが、デイーは技量アップ系でアンデイは威力アップ系のようだ。

「構わないよ。君らに教えてきた僕がギフト程度のハンデで負ける訳がない」

二人には悪いが、自分のスキルについては黙っているし、スキルを目立つように使ったことはない。挑発的に腕を組んで笑うと、デイーは頬を膨らまして杖を取り出す。アンデイの呆れ顔を無視して、

デイーの怒り方に頬を弛ませた。やっぱり子供は可愛いな。これはかの清少納言も書いていたことだ、間違いない。

「あゝ、言ったな。見てなさい。あんたなんか私の技で膝をつかせてふんずけてやってプディングをアシーナさんに作ってもらうんだから」

なかなかコアな冗談を知ってらっしやるな。デイーも例外なくませている。どこでそんな情報を手に入れたんだろ。

「おい、焚き付けてどうすんだよ。一度デイーがああなったら、そんじよそこらの魔法じゃ負けるぜ」

「俄然やる気のデイーと競えるならお菓子くらい安いもんですよ」

男衆が囁いている間、デイーはくるくると身の丈の裕に二倍はある杖をバトンのように回しながら考えこんでいた。

「さあ、決めたわよ。パウロとアンディお兄ちゃんは？」

「一応決めたけど、多分勝てねー」

「アンディ、初めから勝てないと思いきむと、勝てるものも勝てなくなりですよ」

少し諦め気味の兄を励まして、私は二人から離れる。彼らも十分な広さをとり、三人が正三角形になるように立つ。

「じゃあ、まず私から」

軽くて丈夫、さらに周囲の魔力の質を底上げする白の木メルヴィーネの一枝をまるごと用いた杖は持ち主の命に従い、魅了の魔法を奏で始めた。

『嗚呼、水の精霊よ。私の願いを叶え給へ。其は虹の大輪。』

白い杖を掲げ、目をつぶって唱える彼女は天使の彫像そのものだった。発動前に太陽の周りに二重の虹ができたことがいつそう拍車をかけた。

『慈雨の恵み』

虹から燦然と光る緑色の雨が私達の上に降り注ぎ、体に当たった雨粒が陽光にきらめきながら蒸発していった。アンディはそのきらめく雨の綺麗さに、私は雨が一瞬の輝きの後に消える儚さに見とれていた。よくぞ八歳の身で、と私は彼女を目で褒め称えた。彼女はきよとんとしてから、思い出したかのように不敵に笑った。

「さあ、次は誰かしら」

「オレ、パス。あれは無理、あんなに綺麗に発動できるか」

「仕方ないですね。やると言ったからにはやらせてもらいます」

さて、どうしたものか。私はいろいろと記憶から引っ張り出してどれが最高だろうか、と検討を始めた。草原の傍らの道に黒塗りの馬車が停まっており、そこから誰かが見ていたことに気づいた者は誰もいなかった。

派手な攻撃技なら、対象を凍傷から火傷まで調理自在な『霧の女王』や対象を叩き潰す『氷の大槌』があるが、危険すぎる。防御技や補助技もエフェクトが地味なものが多い。適当な技はないだろうか。

ふと辺りを見回すと、ディーのおかげで霧がうつすらでていた。それに気づいて私はいいアイディアが浮かんだ。これなら攻撃技でも失敗のリスクがない。私は近くに生えていたスミレ色の花、カユーラを二輪摘み、指輪をはめた右人差し指を天に向けて唱えた。

『嗚呼、水の精霊よ。私の願いを叶え給へ。其は捕らえる氷の檻。』

カユーラを投げ上げ、指が指す射線に入れた瞬間、周り一帯の霧がダイヤモンドダストとなって銀色にきらきら光り、一気に花に凝集し始める。

『氷結結界』

気温と気圧がぐつと下がり、草の露が全て凍りついた。白い閃光が空中の花から走った後、ごとりと六角の永久氷柱が二つ草の上に落ちた。この技は加減次第で、対象を堅牢な氷に閉じ込めることも圧殺することもできる。結界の範囲を広くすれば、対象を外部から

の攻撃から守る強力な楯にもなる便利技だ。術者が解呪もしくは死亡するまで、この結界は自然に解けることはない。

私はそれを拾い上げ、デイーに歩み寄る。手の中はひんやりとして、それでいて心を暖かくさせた。目を輝かせていたデイーの頬に氷に押し付けて、私はすつと目を細めた。

「ひゃっ！？つめた〜い」

「これは今まで一緒にいてくれたほんのささやかな気持ちだ。受け取って貰えると嬉しい」

そつと小さな彼女の手に氷を握らせた。おどおどとした彼女がじつと私と氷の華を見比べた後、にかつと笑ってくれた。

「ありがとう。大事にするね」

「おい、オレには何かないのかよ」

「心配するな。はい、アンディの分だ。なくすなよ」

私がこれに込めた想いは、単なる友情だけではない。これは私の墓碑であり、生存の証だ。事故で何も家族や友人に言い残すことができなかつたのは今でもしこりとなつて残っている。自分が死ぬ際の準備は早すぎることはない。エジプトの王は即位直後から自分の墓を造ると聞いている。いずれ私は老いて彼らより早く死ぬ。私が生きている証として受け取って欲しいが、まだそれには気付くまい。

俄かに風が吹き抜け、柔らかなスミレ色の花びらが天に舞い散る。私は花の行方を静かに見上げ、軽く溜め息をついた。ぼそつと呟いた。

「一陣の風で花は儂く散るが、氷は最後まで溶けはしないんだ。」  
誰に向けたわけではないが、口に出さずにはいられなかった。

すると、後ろから声をかけられた。

「さつきは実に見事だったぞ。私も混ぜてくれんか」

振り向くと薄手のゴスロリドレスを纏った少女がいた。全体の服装の色がローズレッドで統一されており、周りの風景から浮いて見える。どこか絵本から飛び出してきたお嬢様のような雰囲気漂う。

傲岸不遜な顔でもないが、勝気な目とクールな微笑に不思議な既視感を抱いた。

私も二人も怪訝な表情にすぐさま切り替わった。自慢じゃないが、自分達は耳や鼻、目はかなり聡い。頭上を飛ぶ鳥でも空気を裂く翼の音で気づくはずだ。だが、目の前の少女は全く私達に覺られず、しかも服を汚さずに鼻の先まで近づいたのだ。ハントシャルならともかく、見知らぬ人では不気味に感じられる。警戒度を少し上げて返事をした。

「どちら様でしょうか」

「ああ、自己紹介か。私の名はエリザという。先ほどあなたたちの魔法を見て、つい馬車を停めて見とれていてな。興味本位でここにいるんだが、その、あなたたちは一体？」

敵意はないみたいだ。せつかく出会ったのも何かの縁だ。ここは当たり前障りのない感じにもっていくとするか。

「私はパウロ・ディラック。こちらはオーウェル家のアンドリュートとディーネだ」

「そうか、良い名前だな。…その尖った耳、あなたたちはエルフか」

二人はちよつとびくつとして返事をしそうになかったので、私が代わりに答えた。

「そうですね、彼らはかけがえのない友人ですよ。魔法も上手です」「ふむ。そのことなんだが、あなた達の魔法はそこらの魔法使いよりも洗練されているように見えた。何かコツでもあるのか」

「その話はおいおい。立ち話もなんです、時間はありますか」  
うむ、と十歳くらいの少女がうなずいたのを見て、私は片目をつぶった。

「では、一緒に釣りでもしませんか」

古来から釣りを好む人は実に多く、様々な釣り方が編み出されてきた。そして、平安時代頃には『漁樵問対』から釣りの六物りくもつが定着した。私が生きていた頃には流石に天然素材の釣道具はなかったが、釣り方はしっかり受け継いでいた。

「あっ、そうです。そのまま竿をゆっくり上下に動かして」

今、エリザと私、アンディとディーの二隻のボートで湖の沖まで漕いで釣りをしている。エリザは最初、初めてのボートや釣竿に戸惑っていたが、やはり子供は慣れが早く、エリザはすでに釣りを楽しんでいる。

「しかし、魚を待つのは根気がいるな。なかなか引つかかってくれん」

「そこを楽しむのも釣りの醍醐味というものです」

私はエリザの顔を見ずに、さつとなれた手つきで竿を振る。ぼちやんとハエに見える擬餌が落ちてからしばらくは、水音と草原を撫でる風の音、小鳥の囀りが辺りを占めていた。片手で二房の金糸を梳きながら、ぽつりとエリザが話しかけた。

「なあ、この竿はどこで手に入れたんだ。今まで私が見てきた物とは出来が違う」

「私が設計して作らせた。たいしたものではありませんよ」

「自分で……、設計した？」

「そんなに驚くことだろうか。」

「はい、それでこのリールにも工夫を凝らしましてね……。おや、かかりましたな」

浮きがとぷんと沈み、竿にぐつと重みが伝わる。手に伝わる感触から、大物だろう。程なく私は魚を釣り上げ、ナイフを取り出した。刃物を見てもエリザは顔色一つ変えなかった。突然刃物を出したら、子供は多少なりともびっくりするはずなんだが、と私は首をかしげた。エリザは興味津々に魚を見ていた。

「その魚をどうするんだ？」

「いえ、新鮮なうちに焼いて食べようかな、と」

ものの数分で腑と血をとり、指先から火炎を出して串刺しの魚を焼く。本当は兎のシチューも付け合わせたらいいのだが、これ以上エリザを引き留めるのも悪い。柚子のような果汁を満遍なくかけた。ゴクリとエリザの喉が鳴るのを聞く。

「おいしそうだな。私はいつも料理人に作ってもらったものしか食べることがないから」

「美味しいですよ。まあ、食べてみたらわかります」

おそろおそろエリザはその魚をかじると、途端に顔を綻ばせた。

「さっぱりして旨いな。残りも食べていいのか？」

「ええ、エリザさん。お好きなだけどうぞ」

ひとしきり食事を楽しんだ後、朗らかな表情で私をじっと見つめていた。さらに、粟立つ程清涼な水色の瞳に私は涓浜の器を感じた。

「エリザって呼んでくれ」

「えっ」

「今だけでも、な」

私はこのまま穏やかに午後を過ごすと思っていたが、運命とはそう簡単に私を安穩とさせてはくれなかった。つまり、この日、私は再び設計技師の道を歩もうと決意する運命の日であった。

時を同じくして、プランジャ魔法学院所属大図書館地下五階。この先進的な図書館は学院の知識の結晶であり、古今東西あらゆる場所から様々な分野の資料が集められている。また、とある魔法により資料は貸出不可で破壊も不可能になっている。敷地は尋常ではない広さで、一つの図書館が長さ五十米、高さ二十米もある。一階は御影石の床に大理石の柱、空中回廊にクリスタルの螺旋階段、さらにはミーティングルームまである始末なのだが、地下は昔のまま残されており、入室にも学院長の許可が必要だ。地下は灯りがなく、並べられている資料は大半が古い羊皮紙で本のようにまとまっていない。

そんな埃っぽい地下の最深部でハントシャルはパイプをふかしながら調べものをしていた。目的は神のギフトの記録。ギフトがどのような役割を果たしたのか、自分の記憶以外の事が書かれているか知るために三日間地下に籠もり続けた。だが、進捗状況が芳しくないのと同時に、学院長との会話がいつまでもハントシャルの心に引っかかっていた。

わしが調べものをする際、まず思い当たったのがプランジャの大図書館じゃ。レンドリアンの森などに比べて危険度は低いし、環境も整っておる。問題は学院長に挨拶せねばならんくらいじゃ。んっ？何、挨拶など問題にもならんじゃと。そう思うとる者は奴の言葉の系にくるまれて盲信の毒を打ち込まれ、最後は奴の傀儡に成り下がってしまう。それ程ニールセン・アーベルなる男は油断ならんじゃ。

学院の門をくぐり、迷宮のような廊下を歩いた先に校長室があった。観音開きの扉の前に立つと、中から認識したのか、扉に掛けられておった『罪業の楽園』という極悪非道の魔法が解除され、ガツチャンと二十程の鍵が一気に開く音がした。

ニールの困った趣味の一つが防犯性能の追究じゃ。半ば自分の家になつておるに加えて、職業柄あまりこの学院から出歩かないせいで、室内に隈無く対侵入者用の罾が張り巡らされておる。細かいものを挙げればきりが無いのじゃが、例えば窓に攻撃魔法を当てれば倍の威力で反射するとか、飾り棚の贈答品のワインが人を中から溶かす液体に差し替えられとつたりと、常人には想像もつかん罾が仕掛けられておる。もはや諦めた教員は生徒に、用がなければ校長室には絶対近づくな、と念を押しておるらしい。

扉を開けると、薄暗い部屋を照らす太陽系をかたどつた照明に、爛々と目が赤く光る淡水魚や得体の知れない灰色のミミズが泳いでおる青白い円柱の水槽がわしを出迎えた。背筋の悪寒と共に、右耳から父性を体現したような低い声が聞こえた。

「久し振りだな、ハントシャル。ああ、今代は…？」

「『水仙』のハントシャルじゃ。相変わらず趣味の悪い部屋じゃな。お主の性格を表しておるわい」

照明で目がなれると、わしの右肩に奴の顔があった。後ろから接近したんじゃろうな。

こいつのもう一つの困った趣味は【菊】。ニールは稀少な幽鬼族

で、種族特有の能力【菊】を持っておる。影を剣や盾のように操るだけでなく、自分の影と念じた相手の影を繋いでその間を自由に行き来できる【菊】をニールは芸術に昇華させるべく日々研鑽をしておるらしいのじゃが、心臓に悪いったらありやせん。一度手紙で、最近教員とめつきり会話が少なくなつた、と書いて寄越してきたが、自分から人を遠ざけておることに気づいておらんのじゃろうか。

「心外だな、シャルじいさん。この装飾も百年後には流行るはずだ」  
「お主、本当は学院長に向いていないのではないかの。周りの気苦労が知れんわい」

「まあ、冗談はその辺にしてくれ。俺だって人の心を持つてるんだ。飲み物は何にする？」

「では、コーヒーを頂こうか」

わしは執務机の手前のソファを勧められ、左肩に杖をもたれさせながら腰を降ろした。テーブルの真ん中には、P・D・と刻まれた、軸に支えられている奇妙なコマのような物が置かれていた。見れば見るほど、簡潔にして革新的な技術が使われていることに気づいて、そっと触ろうとした直前、二つのカップと小皿を両手にニールが現れた。透き通った白髪白肌に茶色の瞳を覆う小さな丸眼鏡、知略に溢れた狼を思わせる目と口をしておる。そこにプランジヤ魔法学院の総括を務める秘密がある、とわしは見えておる。性格はともかく、圧倒的なカリスマ性を備えた知性美を全身から漂わしておるのじゃ。  
「さて、本題に入ろうか。話は聞いているよ。大図書館の地下に入る許可が欲しいんだろ？」

「うむ、そうじゃ。ちと興が乗ったもんでな。この年でも知りたいことが山と尽きぬのよ」

ニールも心が読めん薄い笑みを浮かべてカップを取り、足を組んだ。カップの中のコーヒーはまだ温かさを保っておった。

「そうか。実は俺も知りたい事が山と尽きないんだ。一つ、俺のために話を聞いてくれないか。そうすれば、俺はすぐにでもサインするよ」

わしはこの時、疑念が浮かんだのじゃ。この男は学院の長を務める程、膨大な知識を修めておる。知識を有機的に使う頭も持っておるのに、わしに訊かねばならん事などあるのか、とな。

わしの経験上、ニールは突然言いたいことを独白のように語ろうとする。今回も例にもれず、彼は人を惑わす役者となりおった。

「タイトルは神の祝福」

それはわしを揺さぶるのに十分な一言であつたわい。もう少しで口がひきつりそんな所を我慢して、わしは先を促した。

「で、何なのじゃ？」

わしの返答に満足したかのようにニールは目を細め、再び口を開いた。

「一言で祝福と言っても、ギフトの事を指す場合もあれば天賦の才を指す場合もある。元々歴史的には後者を指していたようだが、いつしか前者を指すようになったそうだ。そして面白いことに、昔話に出てくる神に祝福されし者は、皆それぞれの時代に善悪関係なく何らかの影響を与えている。ある者は国を滅ぼし、ある者は国を造

り、ある者は種族間の亀裂を融和させた。いずれも歴史では転換点とも言うべき出来事だ」

ニールは手元にあるコマのような物をいじり回し、まるで雪の結晶をはじめて見た子どものようにうつとりと眺めておった。

「そして、今度はこの時代にも現れた。この大陸最大の領土を持つシリンド帝国と、その軍事力に対抗するために結成されたデトネ連邦の二大国家の冷戦の最中だ。世界は緊迫した停滞に追い込まれそうになっていたのも束の間、帝国にアルテナのギフトが舞い降りた。連邦は色々工作したようだが、運に見放されて悉く失敗してしまう。さらに今年、帝国の皇女が我々の魔法学院に入学することになった。もちろん、中立を謳うプランジャは責任を持って皇女を教育し、学院にいる間、皇女に降りかかるであろう災厄を一切払いのけることになるだろう。そして、おそらく巣立った皇女は一気に連邦に畳み掛けて蹂躪するのではないだろうか。そう、俺はこの作品を見るまではそう思っていたのだ」

「それと、このコマのような物とどう関係あるのじゃ」

「いや、それがあるんだ。ここの鍛冶科にはな、学校とは別に学術都市共同の巨大な工房がある。そこで一般から依頼を受注して、生徒にノウハウ伝授のために依頼物の製作を手伝わせる仕組みなんだが、最近P・D・という奴から面白い物を依頼されたんだ。目の前のこれはジャイロスコープと言ってな、俺が指示して秘密裏にも一つ全く同じものを作らせたんだが、かなり精巧にできている。実用にはまだまだだらしいがな。鍛冶科のカール曰く、こんな代物は見たことがないそうだ。つまり、これを考案した奴は後者の意味で祝福を受けていると言えるだろう」

そのまま彼はもったいぶって両腕を開き、右手を開いた。

「俺はとてそいつに興味を持った。プランジヤの威信にかけて放つておくわけにはいかない。そこで簡単に足取りを追わせただが、調査結果に耳を疑ったんだ。なんと差出人がディラック家じゃないか。そして、イニシャルが合致する人間は十にも満たない子ども一人しかない」

「わしは調べ物を終えたら坊やに自重を教えねばならんな、と固く決意した。」

「それで俺はシャルじいさんが毎日そこに通っているのも聞いて半分納得したわけだ。なぜ放浪癖のじいさんが何年もプランジヤに留まっているか、とな。才能のある子どもに魔法を伝授する。それがもってもらいだろう。だが、俺は納得できなかった。そこでもう少しディラック家の最近の出来事を調べさせたところ、とある事故が浮上してきたんだ」

「ニールは左手を開き、まだまだ話は終わらない、といった顔で話を続けた。」

「五年前の魔法誤作動事故。ハイクラスの雷魔法が放たれて家が消し飛びかけた事故なんだが、聴取も有耶無耶にされてしまったらしい。まあ、被害がほとんど零だったから仕方がないんだが、どうもきな臭い。外部からの攻撃なら事件として乗り出すはずだ。では、内部犯なら誰だろうか。トマスとマリーは有り得ないし、その家の執事と給仕はどちらも信の厚い者たちだから、動機が見当たらないとなると、これまたある一人が浮かび上がってくるんだが、当時そいつは三歳だ。年齢的にありえない、と信じたかった。ここからは俺の推測にすぎんが、ギフトを考慮すると有り得なくもない。イ

ザベラ第一皇女も発現した直後から、城の練兵場を更地に変えたからな。精霊の効果の上限を超えるようなギフトならば、もしかしたら可能かもしれん。それこそ、俺の納得いく残り半分かもしれん。だとしたら、その子は時代の転換点だ。その証左が、このジャイロスコープだ」

すつと目を細めてわしにこう言った。

「さて、俺の独白が仮定となった場合、未来はどうなるのだろうか。何を見せてくれるのだろうか。俺は、新しい世界の色を見たい」  
懐から許可証を取り出してサインをし、わしに手渡した。

「賢人ハントシャルよ。これは動乱の時代の入場チケットだ。受け取り給え」

わしは、むんずとそれを黙ってひったくった。

最初にそれに気づいたのはディーだった。遠くから巨大な物が飛んでくる音を敏感に感じ取り、厳しい目で音のする方をきつと見上げる。この辺りは人間のテリトリー故、モンスターは普通出会わないのだが、母に撃退されたグリフィンドラゴンみたいに稀に侵入してくるのもいる。アンデイも察知して、慌てて私の方へ漕ぎながら張り叫んだ。

「おい、なんかデカイ奴が飛んできてる。早く岸に戻るっ」

それはまずいと思い、岸へと櫂を漕ぐ間に見るみるそれらは大きくなっていく。岸に着いてしっかとそれらを見て、私は声が出なかった。

一つは船体の横に砲門を付けた全長五十米強の木製の船、もう一つは雄壮な翼と強靱な尾を持つ孤高の銀竜、グラシヤルクだ。縄張り意識が強い上位種グラシヤルクは侵入者を積極的に攻撃する習性を持ち、敵を氷漬けにするブレスを吐くと本に書いてあった。実物を見ると体長十五米程だが、かなり大きく感じられる。トパーズの目には明らかに怒りを帯び、船の後ろや横から蹴ったりブレスを吐いたりしている。

私の目には、船が全身を三重の魔法障壁で覆っているのが見え、これでなんとか持ちこたえたのか、と推定した。船も時々、弱々しい雷撃魔法などを放っているが、全く効いていない。

岸が上がった四人はその光景を見て、はつきりと感想が二つに別

れた。

「すっげー。ドラゴンって初めて見た」

「あんなドラゴン、けちよんけちよんよ。ねっ、パウロ。そうでしょ？」

「以前、プランジヤの酔狂な奴が空飛ぶ船を造ったと聞いていたが、これでは……」

「……試作機の試運転の最中に起こった事故、ですかね」

技術班だったから戦略方面はさっぱりだが、都市に向かって撤退するのは迎撃を期待していたとしても下策なんじゃないか。さらに、技術者の観点から言わせれば、ホウキで飛ぶ事だし百歩譲って航海用の船を飛ばす事には目をつぶるとしても、魔法障壁を前面に無駄に大きく張っているせいで、せつかくの軽量をいかした機動力が削がれているのはいただけない。固定砲門が付いているから、おそらく戦艦なのだろうが、あれでは空中を自在に飛び回るモンスターに太刀打ち出来ないだろう。

とりあえず自分の身を最優先にすることにし、全員木陰に身を潜めるように指示したが、エリザだけはまだ空を見つめたままだった。「エリザ、危ないからこっちにきて」

だが、エリザは毅然とした顔でゆったりと体ごと振り返ると、軽くドレスの裾をつまみ、礼をした。

「今日は突然あなた達に割り込んで、一緒に楽しませてもらい、感謝する。ありがとう。パウロ、ディー、アンディ」

「えへへ、どうもいたしまして」

「まあ、礼なんていいぜ」

「ここで言わなくてもいいじゃないですか。エリザを安全な場所まで送りますから」

「いや、ここで別れるから良い。それでお礼も兼ねて、あのトカゲを倒してきてやるっ」

どういう意味だ、と尋ねる間もなく、エリザの背中から大きな灼熱の炎の翼が現れた。あまりに高温なのか、翼は青白く燃えているが、本人は露とも思っていない。

「妾は蒼焰竜族の末裔にしてシリンド帝国第一皇女イザベルじゃ。とはいえ、妾のことはエリザと気軽に呼んでほしい。魔法学院に入るならば近いうちに会えるじゃろっ」

今日は驚きの連続だ。まさか目の前の少女が、と三人とも啞然となっていた。エリザは口に軽く手を当て、カラカラと笑った。

「すまん。正体を明かすと皆、へりくだってしまっからな。しょうがなかったのじゃ」

「…その話し方、不自然ですよ。さっきのエリザの方がよっぽど自然ですね」

「そうよ。リズちゃん、言い方戻した方がいいよ」

「リ、リズちゃん!？」

「ああ、その顔だぜ。なんたら皇女なんて堅苦しいっての。俺たちもう友達だぜ?」

「私が…、友達？」

私はエリザの睨がうつすら潤んでいたのを見逃さなかった。エリザは両手を胸の前に置いて、目をつぶって下を向いた。数瞬のうちに、姿勢を元に戻して明るい笑顔を見せてくれた。

「ありがとう。さて、時間がない」

私たちに背を向けると、エリザはソーサダイトが輝く金の指輪を嵌めた左手を高々と上げて叫んだ。

「私の道に勝利以外はない。そうだろう、アルテナ。私に力を貸してくれ」

『全体強化、収束モード』

軍全体に強化補正をかけるギフトの余剰領域を、あえて自分の強化に乗せする。エリザの全身が薄い赤色に光り始める。そのまま、右手を横に突き出し魔法を詠唱し始める。

『嗚呼、火の精霊よ。我に力を与え給へ。其は炎の大剣。我が捧ぐは我の血。』

『煉獄の業火』



とつさに右の鉤爪を振りかざすと炎剣と衝突し、互いに食い込むようにスパークする。銀竜は敵の顔を見て驚いた。ドラゴンを前にして、絶対強者の勝気な目に、獲物を喰らわんとする獰猛な笑み。

まるで自分が狩られているのではないか。

そう考えてしまった銀竜の目は恐怖に染められてしまった。強大な敵はそれを汲んでくれたのか、耳に残るようにはつきりと語り始めた。

「本来、お前を倒すのに特に理由はいらなかった」

炎剣を振りぬかれ、銀竜が押し出される。遮二無二ブレスを放ち尾を振るが、敵は縦横斜めに軽々と、蝶のようにかわしていく。目の前の青い軌跡が一向に止まることなく、不意に蜂のように刺していく。激突の度に爪は溶け散り、六回目の激突で両手とも使い物にならなくなってしまった。

「目障りだった、邪魔だった、学校が襲われるのを未然に防ぎたかった、プランジャに恩を売っておこうと思った。…今までの私なら、そんな理由でお前を倒していただろう。だが、今は違う」

エリザはぐるりと旋回し、十分な速度を得た後、炎剣をまっすぐ正眼に構えて銀竜に突っ込む。無駄に体力を消耗させられ、恐怖を刻み付けられたドラゴンは反応できなかった。

「今、私はかけがえのない友をお前から守る。それだけだ」

エリザが銀竜とすれ違った直後、竜は断末魔と爆発の音と共に、その命を散らした。

私はその一連の出来事を瞬きもせずに見続けた。かつて、私が手掛けた戦闘型マニピュレーターینگスーツをエリザと重ねて幻視していた。

常軌を逸する機動力、全てを切断するビームサーベル、大火力の兵器。

私の到達点を見た気がした。いや、確信した。私の機械をあのレベルに到達させよう。あの弱々しい木船を、誰もが平伏す絶対不沈の空中戦艦にしてみせよう。私のアドレナリンが体中を駆け巡り、抑えつけられない欲求が全身にみなぎっていた。

ディーとアンディはドラゴンが打ち倒されて歓声をあげていた。エリザはちらつとこちらを向き、大きく手を振った後、草原の馬車の方へと飛んでいった。私はしばらく同じ空の一点をずっと眺め続け、改めて真剣に設計技師の道を歩もう、と決意した。

「すまん、じい。戻ったぞ」

「はあ、殿下ご自身の命令ゆえに護衛を呼びませんでした、肝を冷やしましたぞ」

「まあ、あれはイレギュラーだ。気にするな。それより、じい」

「はい、なんでございましょうか」

「この郊外に住むパウロ、アンドリユー、ディアーネの三人について調べてくれ。うっかり魔法のことを聞き忘れてしまった。何故魔法をあの年で上手く扱っていたのか、重点的に」

「かしこまりました」

彼女はそっけなく執事と会話をしたが、心の中では笑っていた。馬車を走らせていると、開いた窓から淡いカユーラの花びらの一片が、エリザの白い手の甲にふわりとついた。それをしばらくの間じっと見て、彼女はふっと柔らかく微笑んだ。エリザは不思議な親近感と懐かしさを感じながら、どこまでも続く青空を見上げた。

s e c t i o n . 1 4 ( 前 書 き )

本当は伴奏あるけどソロでも違和感ないので大丈夫です。

その日の夜、私は自室で一人、ベッドに腰をかけて思考の海に埋没した。人生とは逆算と修正の積み重ねだ。二十四世紀の技術者が、短い一生でどこまで突き詰めるか。

目標は、私を魅了する機械の製作。

ただ、私の知る技術をそのままこの世界に流用するのは気が引けた。色々な理由が挙げられるが、一番は創作意欲が刺激されないからだ。

そして、この世界には魔法がある。既に魔力を燃料にした内燃機関が研究されている現状、魔力は有効な資源だと一部の識者は気づき始めている。化石燃料と違い、余計な排出物を出さず、地上に膨大に満ち溢れているエネルギーは科学者を狂喜させる代物だ。魔法とは何か、魔力とは何か、という根本的な問題は全く解明されていないが、現象を利用することはできる。機械の代わりに魔法を発達させることも視野に入れた方がいいだろう。

だが、まだまだ情報が足りない。今では学院に入学できないのがもどかしい。あそこの図書館は十歳以下は入館できない事を私は既に体験した。体をよじると、シートがぐしゃっと皺が寄る。ああ、この皺伸びた小さな体の憎いことよ。

少し焦燥に駆られた私は、頭を冷やすために、楽器に集中する事にした。部屋の片隅に立て掛けられた小さなケースを取り、かぱつと開ける。不思議な事に、音楽関連は前世と同じものばかりだ。シツクなニスが薄く塗られた全体、ふくらみのある胴、独特な千字孔に板同士を繋ぐ魂柱。私の手に収まっているのは小さなヴァイオリンだ。表向きはセバスに教えてもらっていることになっている。

先の世の三歳から厳しく練習させられたが、大人になってから存外役に立つ。世の中、いつの時代もコミュニケーションは大切だ。並の人以上プロ以下辺りの実力をつけると、海外で自己をアピールする際に、かなりプラスに働いた。軍の中でも、天から二物三物与えられた奴があり、息抜きに管弦アンサンブルをしたものだ。私はまともな中肉中背だったが、親友が二米はあるガチガチの筋肉に、レスラー顔負けのゴツイ顔の黒人だった。そいつがなぜ、チェロでマイスキー並の演奏ができたのかは今でも謎である。

昔を思い出していると、もう準備ができていた。左腕をぐつと捻り、右手で弓をすつと構える。この時代、スティールとかチタンとかで作られた弦ではなく、動物の腸から作られたガット弦だ。張り替えたばかりだから、ペグでラの音程を調節するも、なかなか上手くいかない。ようやくぴったり442Hzのラを耳で探り当て、他の弦も調節する。本当はバロックピッチの415Hzにするべきなんだが、一人で弾く分だし構わないだろう。顎と肩で軽く本体をはさみ、指板に集中する。

ぴーんと空気が張り詰める。私は彫像のようにじつと構えた。ヴ

アイオリンは、今か今かと音が鳴らされるのを待ち構えている。だが、何となく第一音を鳴らしてしまう誘惑を私は抑えつけた。

私が魅せられる音楽。思わず鳥肌が立つ音楽。

そんな音を奏でたい。

私は意志を弓に込めて弾き始めた。

『F・Kreisler PRALUDIUM UND ALL  
EGRO』

ミとシだけで奏でる始まりは、とてもシンプルが故にごまかしが効かない。悲しいことに腕が軽いので、優しく包み込む深い音を弾くことは叶わないが、それを補うように、繊細な指遣いが音を豊かにする。

大鷲が雄飛するような力強さを。葉がひらひらと舞い落ちる繊細さを。

優美にして大胆な序曲は私に魔法をかけてくれた。

ずっと一拍をおいてアレグロに入る。これも技術的に厄介な場面がないが、ロマンチックに奏するのは割と練習がいる。ころころと指はヴィブラートと共に踊り、弓は時に跳ね、スピッカートを決める。

後半のクライマックスにさしかかった。始めはそつと静かに、段々大きく速く、最後は鬼気迫る勢いで豪快な和音に入る。

炎よりも熱く、氷よりも美しく。

洪めにラストを終えて弓を降ろした時、不思議な高揚感を感じた。納得のいくものを築き、余韻を楽しむ。これは、作品を作り上げた者のみが得られる褒美だ。窓際の椅子に座り、よしよしと細かい布で相棒を撫でると、彼女は喜んでいような気がした。あらゆる物に魂が宿るとは、よく言ったものだ。こういう時に、一番それを身近に感じる。

夏の緑の匂いと、時折鳴く虫の音を静かに愛でていると、後ろから扉が開く音がした。

「パウロ、今度は何の曲を弾いたんだい。父さんでも聴いたことがないな」

弾いた後はこうして毎回誰かがやって来るが、今日は父らしい。

「大したものではありませんよ、お父様。買い物にいった時に偶然ストリートが弾いていたのを真似しただけですよ」

間違っても、異世界の音楽だなんて言えない。

「ふむ、そうか。パウロはなんでもできていいな、父さんなんて何

もできないからな」

あまり深く追及しないのが父さんの美点だ。人の機微に敏感な人だからかな。ただ、素直にそれを嬉しい、と感じることができない。父は事情を知らないから仕方がないけど、前世の努力を無下にされた気分だ。いかな、老人の頑固になる性格の弊害だ。私もいい年した大人だから、悪気のない年下の父を責めるつもりはさらさらない。

「私も何にもできませんよ。やればやるほど、自分の延ばせる手の範囲がわかるんです」

一人ではどうしても届かない高み。楽器は弾けても楽器は作れない。機械一つ作るにしたって、何千何万と人が働く。結局、私は懐中時計の一個の歯車に過ぎないのだ。私は窓をぼんやりと眺め、物憂げな気持ちになった。あなたについていけない、と周りに突き放された自分が恐ろしいのだ。父はハハハと小気味良く笑うと、私の肩にそつと両手を置いた。背中から暖かいテノールが話し掛ける。

「今日は落ち着いていないな、と思ったら、そういう事か。そりゃあ、一人ができる事なんて高が知れている。けどな、だからこそ人は集まって協力して生きているんだ」

わかってはいるんだ。目標ははっきりしている。だけど、それに周りが付いてこれるかどうか。神の奇跡でも起きない限りは、到底無理だ。

神の奇跡？

何か喉につつかえた物が取れた気がした。あの二人が、何故あれだけ魔法が上達したのかわかった気がする。

「ありがとう、お父様。おかげですつきりしました」

上を向いて軽く微笑むと、父はフツと笑い、

「何、息子の悩みを聞いてあげるのは父親の義務だからな。何てことはない」

明日は少し忙しくなりそうだ。

二人にどんなテストをしようか、私はまた思考の海に埋没し始めた。

翌朝、日の出とともに起床。家の外で年齢を考慮した適度なトレーニングをした後、アシーナ特製の青汁を軽く啣る。朝食は丸い小さなパン、小綺麗に盛り付けられたサラダ、薄いミルクと質素なものだ。午前中は曜日によって、礼儀作法や歴史やフェンシングと勉強する事が変わる。私には、ほとんどセバスが付きつきりで教えてもらっているが、なかなかどうして万能である。今日は偶々セバスの休養日にあたるので、空いた時間を趣味に充てている。

この世界にまだない機械を設計する以外にも、楽しみはまだまだある。それは、新しい魔法の開発。詠唱魔法も元を辿れば魔法陣に行き着き、魔法陣は決められた構文に基づいて記述されたレシピのようなもの。そのロジックをきっちり理解できれば、既存の魔法を改造するのはある程度簡単だ。

長年軍属であった私は、MSだけでなく、それをそつなく操縦するための補助デバイスなども製作したことがある。その機能は、主に反応速度を強化するというものだ。生物は感覚器官で刺激を微弱な電気信号に変換し、それを感覚神経を通して中枢神経に伝達する。そして、脳や脊髄が命令を再び電気信号で末端に送り、手や足の筋肉を動かしたりするというのが大ざっぱな運動の仕組みだ。だが、光の速度が有限であるのと同じ、電気信号の神経伝達速度も有限だ。不意に落とされた定規をパツと片手で捕まえられるか、と考えるとわかりやすい。つまり、私はその補助デバイスを魔法で肩代わりできないか、と考えたわけだ。

そういう訳で、先程から雷の基礎魔法からちまちまと弄っているのだが、そもそも魔法で人体の内部を傷つけずにミクロな制御を行う発想自体がまだ存在していない現状、神経を焼き切らずに発動させることができるような構文がまだ辞書ですら載っていないかった。世の中は上手くできているもので、私の理不尽なギフトでも新しい構文を自動で製作してはくれなかった。今のところこのギフトの効果は、技術習得の最適化と特殊な魔法陣操作しか確認していない。それでも、自分だけでなく周囲の人間にも効果を及ぼすみたいだから破格に違いないのだが、もし予想通りならば、午後の実験は面白いことになる。

結局、私は構想だけ練ってメモにストックすることにした。学院にさえ入れれば構文製作技術も手に入れられるだろう。他にも風魔法と水魔法を合成した移動速度強化魔法や、雷魔法を応用した原子配列精査魔法など、思いつくだけネタをストックしていく。作業を終えて一息ついていると、アシーナが入ってきた。

「失礼します。お二方を玄関に通しましたよ。いかがなさいますか」「わかった。下に降りよう」

「かしこまりました。では、私はお菓子を用意しますね」

「あつ、ちよつと待って」

「はい？」

「セバスを呼んでくれないか」

「今日は休養日ですよ？」

「わかってる。別に仕事じゃなくて、ゲームをしたいだけだ。どうしても四人必要でさ」

かしこまりました、というアシーナの返答を置き去りにして玄関

に行く、二人が待っていた。

デイーが頬を軽く膨らまして私にビシリと指差す。

「遅いわよ、パウロ。私が着いたら、れいてんきゅうきゅうきゅう秒で出なさい」

子供の細かいアクションはスルーさせて頂きます。

「ごめんごめん。ちゃんとお菓子を用意したので我慢してください」

「なあ、今日は何して遊ぶんだ？」

「私の部屋で詳しく話しますよ」

部屋に入ると二人はほおつと声をあげた。これまで家には招いたことはあるけど、応接間で菓子を食べてすぐに外で遊んでいたからだ。

「何つつうか、パウロっていつも思うけど大人っぽいよな」

簡素なベッドに清潔感のある白いシーツが張っており、横には魔道具のテールランプと落ち着いた褐色の小さな円卓があり、窓際には檜の木でできた機能性重視の机の上に書きかけの羊皮紙、丁寧に綴じられた本が乱雑に置かれている。ちょうど日が南の天高く登る時間だったために、それらが暖かく輝いて見える。窓から入るそよ風が、薄くて白いカーテンをゆるやかに揺らすためかせていた。

「そうですね。ただ、無駄を省いて快適な部屋にしたいですよ」  
「それって八才が言うセリフじゃねーよ」

やっぱりな、と呆れたらしいアンディをよそに、デイーがベッドにダイブしていた。

「ああ、ベッドふかふか！ねえねえ、このベッドわたしにちょうだい」

枕に顔を沈めないでください。涎で汚れます。お尻を横にフリフリしないでください。シーツが皺だらけになります。

「はあ、と私はため息をついた。後でシートを整えないといけない私の身になってくれ、とげんなりしてしまった。」

「そんなに欲しいなら、今夜泊まればいいじゃないですか。パジャマ・パーティーもいいですね」

子供の添い寝は既にベテランの領域にある私にとって、それ位は苦にもならない。しかし意外なことに、私の提案にディーは顔を真っ赤にして俯いてしまった。

「いや……、遠慮しとく」

んっ、こういう所は一丁前なのか。やはり世界を越えても女性を理解するのは難しい。どこまでレディーとして扱えばいいのか微妙な年だから厄介だ。その点、まだアンデイの方が扱いやすい。

「じゃあ、こつちに来てゲームをしましょう。あつ、セバスカ。悪いね、せつかくの休みなのに子供の遊びに付き合わせて」

「滅相もございません。ただ、服の着替えに苦労しまして。時間をかけてしまいました。申し訳ございません」

目の前には小さなご老人がいた。初めは怖いもの見たさでセバスを見たが、意外に愛嬌のある姿だと知ってからは気兼ねなくプライベートでも会っている。アンデイが焦れたそうに腕を後ろに組む。

「なあ、何のゲームだ？」

「ええ。ルールさえ知っていれば誰でも遊べ、直感と運と戦略を必要とし、嵌れば中毒になってしまう子どものゲームですよ」

ベッド脇の円卓を持ってきて、引き出しからゲームに必要なカー

ドとチップを取り出す。さあ、私のギフトがどれほどのものか示してくれ。

「ポーカーをしましょう」

全員の目に火が灯った気がした。

section.16 (前書き)

ポーカーのルール

http://ja.wikipedia.org/wiki/  
E3%83%9D%E3%83%BC%E3%82%AB%E3%  
83%BC

ゲームを開始してから二時間が経過。私はギリギリと胃をしぼられたような気分になっていた。始めは勝ち越していたが、次第に三人が段々巻き返してきたからだ。少しずつ手元のチップが削られていくと、どうしても焦ってしまう。頭の中の評論家がけなして、もう場から抜けた方がいい、と忠告してもらってやっと、私は平静に戻った。大丈夫だ、自分を信じる。そう考えるしかなかった。この時、私は実験の効果を観察するより、次の勝率を考えていた。ギフトの補強があるからと言って、初心者に負けるわけにはいかない。人生の先達の意地が私を支配していた。

ゲームはノーリミット・ホールデムで手札はハートの2とスペードの2のポケットペア。随分危ない手札だ。本物の金が賭けられている場合なら、まず真つ先に降りるだろう悪手だ。だが、場の五枚のカード次第では逆転も可能だ。とりあえずベットして様子を見る。フラップが少しでも雲行きが怪しければ、すぐに降りるつもりだ。

だが、運命の女神は私の車輪を上手く回してくれたらしい。めくられた場の三枚のカード、フラップはクラブの2、ダイヤの2、ダイヤのエースだった。まるで雲一点ない青空の中でmatterホルンを見ているような心地になった。この時点で私は2のフォーカードが作れる。これより上の役は3以上のフォーカードとストレートフラッシュのみ。はつきり言って、勝ったも同然だった。ならば、今度はいかに相手からチップを搾り取るか、に焦点がしぼられる。相手も最弱の2で勝負してくるとは思えないだろう。

この三枚で大きく勝負に出るのは、おそらくエースを持っている奴とフラッシュ待ちの奴だ。エースと2のツーカー、もしくはエースのフルハウスか。フラッシュならばダイヤだろう。どちらにしろ、私の絶好のカモだ。有り得るダイヤのストレートフラッシュは三通り。クラブのストレートフラッシュはさらに確率が低い。危険な役はエースのフォーカードだが、一回のゲームでフォーカードが二回同時に出たことなど、七十年の中で全くない。

心臓がドクンと唸る。体がスピリタスのストレートをグラス一杯飲み干した後のように神経が高ぶる。

やはり、ギャンブルはこうでなくては。ここは中途半端な手札を持つてるが、迷った末に迂闊に賭けてしまったように見せかけるか。

「コール」  
左隣りのセバスは表情ひとつ変えず、チップをさらに多く前に出した。

「レイズします」

デューはさらっとコール。アンディはすぐに降りた。

「デュー、何を笑ってるんだい？」

「なんかピンと来たの」

「？」

「ものすごい波を感じるわ」

……ブラフか。いくら強運でもデューがストレートフラッシュを作るのは1%未満。だが、そのニヤニヤした笑いは何なのだろうか。何が彼女をそうさせる。

奇妙な懐疑心を振り払って、四枚目のカードが開かれるのを見る。四枚目は……、ダイヤのキング。

背中の汗がじとっと流れる。もう一度暗記している確率を再確認してみる。このルールで考えられる手は合計一億三四 万通り。そのうち、フォーカードは二二万四八四八通り。つまり約0.2%。ストレートフラッシュは三万八九一六通り。つまり約0.03%。両方が起こる確率なんて限りなくゼロ。それを鎮静剤にして、もう一度テーブルを見る。

五枚目はダイヤの10だった。これで場のカードは全てオープンした。ここからは、少し強気でいこう。

手元から緑色のチップを二十枚前に出す。なぜか手首が若干震えた。「レイズ」

フォーカードが負けるはずがない。そうでなければ、どうやって勝負するんだ？だが、今度もセバスが待ったをかけた。

「では私もレイズで」

場にてているチップの数が倍に膨れ上がる。宝の山を前にした私はアリババか、それともカシムか。これはもう、セバスはエースのフルハウスだろう。彼は今までストレート以上の、比較的安全な役でしか勝負しない。

「じゃあ、私もレイズー！」

テーブルには山と積まれた緑や黒のチップ。ここで逃げるのは考えられない。どこか不気味に感じられるディーの強気なアクション

に頭を痛めた。いったい何を根拠に勝負しているんだ。今日二度目のため息をつきながら、コールした。もう手持ちのチップはほとんどない。ようやくと、セバスは私を理解したらしい。眉間を少し皺寄せて喉を鳴らしたから、多分そうだろう。

「さあ、手を見せたらどうだ」

私は、ぼんと手札を二枚表にした。それを見たセバスは、一度咳払いしてから自分の手を開いた。やはりクラブとハートのエース、最強のフルハウスか。

「勝てると思ってたんですがね。いや、坊ちゃんには驚かされませんでした。まさかフォーカードを持ってらっしゃるとは」

「さて、後はディーだ」

ディーはもったいぶって一枚一枚ゆっくり開いた。ダイヤのクイーンが見えたとき、思わず眩暈がした。続いてダイヤのジャックが出るころには、私は全身が脱力してテーブルに頭を乗せた。どうやら彼女がモルジアナだったらしい。まさかロイヤルストレートフラッシュだなんて。

「全く、ワシの弟子ともあろう者が若造に負けるとは情けない」

横に顔を向けるとハントシャルがいた。全く気配を感じなかったが…。

「先生、お久しぶりですね。いついらしたんです？ドアの音もしませんでしたか」

「あそこの花瓶の水から転移してきたの。ちょうどお主が大逆転さ

れる所じゃったな」

「そんな魔法があるんですか」

「かなり難しいもんじゃから、今や使い手はわし位しかおらん。安心せい」

たしかに、誰でも彼でも彼でも転移できたらとんでもない事になるだろう。だが、普段は歩いてやってくるハントシャルが何故。

「わざわざ高度な魔法を使ってくる必要があつたのですか？」

胸元に飛び込んでくる二人の子どもをあやしつつ、翡翠色の瞳の老人が答えた。

「ふむ、もうそのポーカーでギフトの一端は掴んでおるようじゃな」

「はい、セバスはともかく、二人は驚異的なスピードで成長しました。もう少し経験を積めば、下町の賭場を荒らし回れるでしょうね」

「ねえ、ギフトって誰のギフト？」

私は口をきゅっと結んだ。なぜ二人がいるこの場で、私のギフトの話を持ち出すんだ。二つのエメラルドの瞳からは真剣な色を放っている。老人は声を低くして話し始めた。

「少々事情が変わつての。お主のギフトは既に明るみに出てしまつた。詳細にはわかつておらんようだが、少なくとも学院は、お主が異常なギフトを持っておるのを把握しておる」

「一体どこから……」

「これはお主だけの責任ではない。わしの行動も詰めが甘かつたのじゃ。そこで、これからは不特定多数の人間にお主の情報が洩れた上での行動に移る。最悪の事態を想定しての」

しかし、常に暗殺を警戒しながら生活するのは、なかなかいだつものだ。それに自分だけじゃない。アンディやディーも巻き込まれるかもしれない。

「アルフ坊や、ディーアネ嬢。お主らもわしの授業を受けてみんなね」

「ええ、本当にいいのか？ハントシャルお爺さん」

「わたしにも教えてくれるの」

「通常料金で、今なら一割引にまけてやるわい」

取る所はしっかり取る姿勢に、この守銭奴め、と内心毒づいた。実際には、ポーカで負けた腹いせに当てこすっているだけだ。

「で、私達をどうするんです」

「ちよつとマリーを巻き込んで、お主らを本格的に鍛えておこうと思う。なぐに、パウロ坊やは二人に魔法を教えておつたのじゃろ？おそろくついていけるわい。ところで、二人はまだパウロのギフトの事は知らないのじゃな？」

「えっ、ギフトないんじゃないの？」

「おれもてつきり何も持ってないと思つてたぜ。なんで言ってくれなかつたんだ？」

「それは……」

今まで黙っておいて、今更白状するのは心苦しい。それを察してか、ハントシャルが私のフォローに回った。

「わしが代わりに答えておこう。左様、お主らには今まで秘密にしてきたのじゃ。もし話せば、いらぬ災いが降りかかるやもしれぬと思つてな。じゃが、お主らはもう十分約束を守る年になつとるし、二人ともしっかりしとる。特別に、パウロ坊やの秘密を教えてやるう。ああ、それとの」

帽子を取って、顎鬚を指で梳きながら私に目を向けた。

「あの皇女にもう会つたかの？街で遭つて、やけにお主の事を尋ねてきたのじゃが」

話は長くなりそうだ。重たい頭を持ち上げて、私はよっこらしょと椅子から立ち上がった。

「というわけです」

私達はかなり真剣な遊びを興じた後、遅めの午後のお茶を楽しんでいる。今し方ハントシャルと互いの報告を終えた後だ。特に、エリザとの邂逅とその直後の出来事は彼の興味を少なからず引き寄せた。

「なるほど、そういう事じゃったのか。それであの皇女の態度も納得いくわい」

「しかし、なぜ先生に尋ねたのでしょうか」

「パウロ坊やの事を知っておると当てにいただけじゃろう」

「私の調査の一環では？」

彼女なら一晩で情報をそれなりに集める力を持っているはずだ。私とハントシャルの繋がりを発見したかもしれない。

「ふむ、そうかもしねんの。本当にお主は目を付けられる奴じゃの。もう少しじつとできんのか」

「何もせずとも、いずれバれていたんです。こちらも万全にした上でやりたい事を積極的にやった方が得策でしょう。少なくとも敵になめられず、安全なバックとなる学院を味方につけやすくなります。彼らは学問的、実用的に業績のある人間を追い出しはしませんからね。それに……、」

私は不敵な笑みを浮かべた。

「先に言っておきますが、殊自分の趣味に関してはこれから手を抜いたりしません」

「あのジャイロスコープか」

「ええ、もう量産していたのですか」

「いや、学院長に試作品を見せられた。他にも依頼をしたのか？」

「いえ、依頼はそれだけなのですが……」

ハントシャルの鼓動が聞こえてきた気がする。

「手始めに、あちらの学院に技術を売る形で挑戦状を送る予定です」  
「挑戦状じゃと？」

「はい、全ての技術を私の独占にしては目の仇にされますからね。先行投資でアイデアを売るんです。具体的には、既存の紡績機の三世代先の改良版の設計書、新しい製紙法、火・水・風属性複合型蒸気機関の設計書とそれを応用した鉄道や船の構想案程度です」

じつと静かに聴いていた灰色髪の老人は、しばし目をつむり、うーんと唸っていた。あつ、こら。デー、私の頭に顎を載せてはいけません。アンディとお菓子を摘まんでおきなさい。

「それだけで、ざっと勘定して多大な利益が見込めるの。それだけの発想を平然と売り渡す度胸はどこから来るのじゃ。一体、お主はどこまで先を見ておるのじゃ」

澄んだ紅茶の香りを味わい、明るい水面に映る自身に触れながら、ほんの一口、舌先を撫でる程の数滴に耳を澄ます。一拍おいて私は、向かい合うしわくちやの疲れた顔のさらに向こうを見つめた。

「あなたよりはるか先です」  
百年も二百年も、いや、五百年程か。私はやんわりと老魔法使いをなだめた。

「安心してください。私は魔法について新しい見方、考え方を提示するだけです。決して、魔法を蔑ろにする未来は描いていません」

「いかん、わしは感じるぞい。大いなる自然を冒涇した末の破滅が見えるのじゃ。お主が目指すのはそんな未来なのか」

「先生、私は理由なくして物事はないと思っています。私にこのよ  
うな祝福が与えられたのも、必ず理由があるはずです」

優しくカップを置いて、頭にのしかかっている少女の脇を持って、  
自分の膝に彼女の頭を載せる。

軽く横腹と喉をくすぐりながら、私はしんみりと語った。

「私は私が為したいことを為します。その結果、新たな問題が起こ  
るでしょう。何年先かわかりませんが、それを避けることはおそら  
く不可能です。勿論予防策はできるだけ施します。が、問題が起こ  
った時はその時です。私が生きていたら、私が率先して考えればい  
いし、死んでいたら、誰かが解決しようと頑張りますよ。私は人を  
信じます。そんな破局には絶対なりません」

私とハントシャルの瞳が錯綜する。デイーはくすぐったいのか、ゴ  
ロゴロと膝の上で悶えている。その猫のような愛らしさに、私はデ  
イーをペットとみなすことにした。

「さて、そんな何十年も先の話は置いて、リストの件ですが、  
しばらく彼らに理解できないと思います」

「そりゃあ、未知の技術や機械を書いておるからの」  
私はもう一度お茶を飲む。

「それ以前に、まともに読めればいいんですがね。学院の連中はし  
ばらく子供の作った暗号の解読に躍起になるでしょうね」  
「ちょっと難しいパズルだが、考古学か数学の教員達の良い暇つぶし  
にはなるはずだ。」

時が穏やかに、平和に進んでいくのを肌で感じた。舌に広がるほ  
のかな苦みに目を閉じると、自然と昔が想い出された。

「はあ、双子はともかくドミニオンが破損するなんて。何とやり合ったらこうなるんだ？」

西暦2337年、木星と殆ど同じ軌道を公転するトロヤ群小惑星の一つ、パトロクロスのプラントで私は損傷した三体の機体、『ドミニオン-X001』、『カストル-000』、『ポルツクス-000』を修理していた。

私が設計・開発したこの機体は、ATONMENTのMSの中でも次元の違う機動力と武装を備えている。ドミニオン、カストル、ポルツクスはそれぞれ緋色、白色、黄色をメインカラーに塗装されている。

ドミニオンはオールラウンド型の機体で、対近距離はビームソーと実体剣の二刀流で、対中距離は両脚の追尾ミサイルで、対遠距離は射程10kmのビームライフルを装備している。さらに機関とは別に、全身の各部位にあるコンデンサに蓄積させたエネルギーで対物バリアも張れるため、あらゆるミッションを安定して遂行する能力を持つ。ソマリア会戦では、敵のユーラフリカ軍の主力MS二百機を一機で屠るといって、悪魔的な戦功を挙げている。

カストルは広域殲滅型で、機関から限界までチャージしたエネルギーを、右肩にドッキングさせた大型レーザーキャノンに流して、200km先の敵を塵にする。自身の二十倍はある空中戦艦を一撃で沈める光景は圧巻だった。

ポルツクスは後方支援型で、ドミニオンに引けを取らない戦闘力を持つが、それよりも情報操作に卓越し、通信の傍受は勿論の事、敵の機体を解析して内部に干渉することができる程、強力な演算能力を有している。常に連合軍を影から支えている形をとり、敵の肝心な時に誤作動させたり、機能停止させたり、偽の通信を流したりするなど、かなりえげつない事をしてきた。

「ユーラフリカのMSに手酷くやられたよ。かなり強かったね」

グラビトン制御装置によって、この製造プラントは地球と同じ重力を擬似的に再現している。長期的な宇宙活動をするに当たって、重力圏に身を置くことはどうしても必要な処置だ。後ろの入口から入ってきたのは、ドミニオンの女性パイロット、カジャ・ボイス。長身で褐色の引き締まった体つきは、パイロットスーツの上からでもよくわかる。スレンダーな体に加え、ストレートな黒髪に凜とした顔は、見る者に出来る女、と第一印象を与える。実際にドミニオンの操縦ポテンシャルの高さから裏付けされており、結構男性から交際を求められるらしいのだが、残念なことにドミニオンが生涯の伴侶らしく、全て断っているようだ。

私は後ろを振り向いて、薄いフレームの眼鏡を押し上げた。

「カジャに土をつける奴がいるとは。一体どんな奴だい？」

敵の機体はメインカメラの映像記録から既に盗み見た。一目見ただけで、独自設計された最新鋭の機体だとわかった。敵はともかく、目下の問題はドミニオンの中身だ。普段は負けん気の強く、クールな微笑を湛えるカジャも無言で俯き、思い出すように語った。

「……若かった。経験で戦うそれではなく、そう、野獣と対峙しているみたいだったな。ただ、経験のハンディを物ともしない超人的な反応と直観力で戦っていた。あれは、言ってしまうえば若い狼だ」  
「なるほど。まあ、その狼さんには食べられないよう用心することだな」

「あまりからかわないでくれよ」

彼女の勝気な目に力が戻りつつある。少しは元気になったか。

「だが、戦闘は途中まで互角というより、カジャの方が優勢だった。何故いきなり動きが鈍くなった、カジャ大尉」

私は仕事の調子に戻した。フランクを通り越した馴れ合いは、軍というヒストイックな集団には良くない。

「戦闘の最中にオープンチャンネルで通信が入ってきました」

「その奴さんからか」

「そうです。そして、私に尋ねてきました」

なぜ俺達はいがみあって戦ってるんだ。

どうして大事な物を失わなければいけないんだ。

あんたは、この戦争の果てに得たいものがあるのか。

彼女の瞳には迷いが生じていた。国のため、国民のため、家族のために、彼女は無心になつて敵を殺し続けた。だが、どこかで割り切らずに考えていたのだろう。自分が築いた骨の山の頂に、何が残るのか。殺した人の友人や家族に、自分は何をしてあげられるだろうか。

「その少年の声を聴いて、私は今まで殺してきた人間の言葉に感じられました」

カジヤは情に厚い。見た目がクールだから気付く人間は少ないが、人の気持ちに敏感な子だ。私は部屋の片隅に置いていたジャーで、断熱性ボール型カップに紅茶を淹れる。それらを持っていき、紅茶の入ったボールを一つ、カジヤに手渡した。

「ありがとうございます」

「どういたしまして。さて、大尉はそれで悩んでいたのか」

「はい、今でもよくわかりません」

彼女は私に何かを求めているのだろう。私は透明なボールを通して、赤い液体を眺めた。

「大尉、私もわからないよ」

見なくてもわかる。そこには驚きか、失望か、そんな所だろう。

「私は、国とか博愛とか薄っぺらい言い訳を全部取っ払ったら、後に残るのは、楽しみたいから。たったそれだけで戦っている。私は昔から機械弄りが大好きでね。幼稚園でラジオを作って遊ぶ程だった。そして、戦争でテレビに映った最新兵器のMSを見て、自分の手であれを作りたい、と素朴に思ったんだ」

縦横無尽に動く様をみて、あれを人工の神かと思った程だ。

「だから、私は此処にいる。私は、自分から望んで戦争に参加しているんだ」

君はどうだい？

「私は…、ずっとドミニオンといたいです。ですが、私が戦争で得たいものは……」

「少年はある意味正しいよ。でもね、彼が戦場にいる以上、彼自身もはっきり答えることはできない。結局、戦争を突き動かしている人間は皆、満足に答えることはできない」

戦争の原因は政治、宗教、経済や民族などが挙げることができる。だが、個人として相手の国民全員に敵対感情が湧くわけではない。自分が大切にしていた人を失う理由は、戦争でなくても五万と考える人がいる。だが、そんな人の死を受け入れるための理由は当然のことながら、なかなか見つからない。戦争行為の中、血の代価で得られる道義的にプラスなものは、ないんじゃないだろうか。

「彼はそれを言いたかったんじゃない……」

「そうだ。彼は悲しみや怒りをぶつけたかったんだろう。だけど、そんな子供の駄々で大尉は死ぬかもしれないなかった」  
ストローから溢れる赤い液体は、かすかに苦かった。

「大尉はぬるい。一瞬の油断と迷いで死ぬ戦場で、判断を鈍らせる思考は切り捨てるべきだ。今回は運が良かったけど、次はない」  
「はい」

「上官に言っつて、休みを取れ。大尉に必要なのは、『一線』を見つけることだ。その間に、私がこの機体を元通りにしてやるっ」

私がかジャにしてやれる事はこれ位だ。もう一度飲むと、やっぱり

り苦かった。片目でウィンクすると、悩ましげな顔が束の間、笑みを取り戻した。

「ありがとうございます、ミノル少佐」

「あまり気にするなよ。ああ、それとも一つ訊きたいことがある」「何ですか」

「私はドミニオンをただの道具だと思っているが、大尉はどう思う？この機体は、戦争を終わらせる存在なのか、それとも、戦争を助長する存在なのか」

緋色の機体は静かに世界を眺めていた。カジヤは彫像のように、じつと彼を見上げ、目で語り合っていた。

「それは、私が決めることです」「踵を返し、彼女は出口に立った。

「私は、ドミニオンで自分が納得できる終わりを掴み取ります。失礼しました」

ボールにはもう紅茶が空になっていた。答えのない問いを考えているうちに、纏わりつくような独特な感触が口内を占めた。

「……ウロ、パウロ」

目を開けると、赤い芳しい液面は、一向に水位が下がっていない。気づけば、デイーと私の顔が目と鼻の先だった。

「大丈夫？顔がこわいよ？」

「少し考え事をしてて」

「へえー、なぐにを考えてたの」

「秘密です」

「イジワル」

八才に戦争の話は酷というものだ。

「デイーが一人前のレデイーになれば教えてあげますよ」

どこまでも平和で穏やかな日々が続くように思えた。だが、いずれ日常は否応なく変化していく。最も命が安い時代を生きぬいてきた私にとって、この瞬間も代え難い大切な一時だ、と改めて感じた。

からつとした夏の日差しに秋の匂いが感じられる頃、私とディー、アンデイの三人は、エリザと出会った湖に来た。今日から魔法を使った護身、余裕があれば戦闘の訓練を徹底的にするらしい。目をきらきらさせて、楽しみにしている二人とは違い、私は嫌な予感を感じていた。

「先生、魔法使いの戦闘はどんな物なんですか」

灰色の翁は杖を肩に担ぎ直した。

「陣の後ろから魔法を打ち出して一方的に叩くのが主流じゃが、プランジャのように物量に欠ける軍隊は、戦闘の早期終結が吉。それ故、とかく制空権を掌握する研究と、剣・銃・魔法を使いこなす精鋭の育成に心血を注いでいる。帝国は内部変革の途中じゃが、皇女が出れば戦法は予想不可能じゃ」

エリザのドラゴンとの戦闘を思い出す。

「文献に何か書かれていたのではないのですか」

「昔話曰わく、槍兵が皆、疾風のごとく馳せ迫り、剣士が迅雷のごとく我等を屠り、天から降り注ぐ火の球が砦を押し潰し、戦場を地獄に変えた、とな」

……もはや何も言つまい。

「それ、蹂躪の間違いじゃないですか？」

「蹂躪でも撤退でも、戦争は戦争よ」

後ろから軍服姿の母が伸びをしながら歩み寄ってきた。

魔導繊維を織り込んだそれは、背景に合わせて色が変化している。アンデイは横目で色が変化する様を見ながら、私に呟いた。

「なあ、なんであんな薄い服なんだ。普通は全身鎧じゃないのか？」  
「えつとですね。戦闘に使われる魔法は貫通系が多いんだ。ここ五十年で魔法がさらに改良されて、もう鎧が意味をなさないみたいだね。それに、銃の威力も上がっているのも一因だって」

そこで学院は機動性を上げるために服を一新した、という話だ。彼女の腰のベルトには応急魔法薬一式に、二丁の回転式連発銃とレイピアを提げている。

「それで、あんな服を着てるのか。納得」

「ええ。魔法のバリアは元々性能が高いから、昔はそれを万能の楯にしてたんだ。だから、魔法使いをどれだけ保有するかで勝敗が決まるが多かった。けど今はそのバリアの防御力と、攻撃魔法及び兵器の貫通力とのいたちごっこが繰り広げられているんだ」

戦争を通して、魔法が科学技術を促進させるという構図に、私は当然と思いつつも不思議に感じていた。この世界では、古き魔法なる技術に新しい科学なる技術を取り込んでいく形を取っている。これは前世の発展の歴史とは異なっており、要するに発展の軸が早期に魔法で出来上がり、それを科学技術が追従しているのだ。それ故、魔法使いは一般人より新たな科学的発見に寛容で、むしろ従来の魔法に応用していく柔軟な思考をしていた。おそらく通信技術が開発されても、魔法使いは難なく受け入れるだろう。また、両親が生まれて数年で異常な技術を開発した私を、異端児ではなく天才児と扱ってくれる理由の一つにもなっている。魔法という技術は科学技術の水先案内人であり、思想の発展にも恩恵をもたらしていた。

開けた湖岸にたどり着くと、ハントシャルと母とアシーナが私達

の前に並んだ。

「さて、今日からお主らに生き残る術を全て叩き込むつもりじゃが、いきなりしごくのも可哀想じゃから、わしらの戦い方を見てもらう。生の戦闘は迫力が違うしの」

「私とアシーナが軍にいた頃の模擬戦を見せてあげるわ」

だが、アシーナがいつものメイド服なのが気になる。

「アシーナ。その服でできるのか？」

「大丈夫ですよ、坊ちゃま。これは耐物、耐魔力、耐熱、耐毒に強化されています。マリー様の服と同じ性能です。ご安心ください」

そして、さらに気になるのは、アシーナが担いでいる異様な黒い片刃の大剣だ。二米はある大剣の背には、黒い龍の歯をかたどった鋭い突起が並んでおり、柄の真ん中には禍々しい赤い龍眼がはめ込まれている。その不気味な気配に気づいたのか、デーは恐る恐るアシーナに尋ねた。

110

「あの……、それで戦うの？」

「はい、今日はハントシャル対私とマリー様の二対二で勝負します。全員手心加えますので、それなりに魅せる勝負になりますよ」  
微妙に返答が間違っている気がしないでもない。

「じゃあさ、誰が一番強いのか？」

アンデイの率直な質問にアシーナは押し黙ってしまった。主人を落とす発言はできないのだろう。代わりに母が口を開いた。

「シャルが一番強いわね。本気で来られたら、私達二人とも瞬殺よ。」

それに、殺しても死なないような人だから、実戦形式をするのに最適なのよ」

なるほど。人間じゃねえから叩つ斬つても問題ない…、と。

「全く。わしを何じやと思つとるのか」

「人外ね」

「変人です」

「私は偏屈かと」

「頑固だろ」

「優しいおじいちゃん！」

返事をした五人の中で、ディーが一人、優しくいたわった。ディー、その優しさは大事にしなさい。ただ、空気を察せれば完璧なんだけど。

うなだれたハントシャルはすつと消え、湖面の真ん中に立った。

一瞬で数百米を移動する術に驚きを隠せない。互いに沈黙して、目配せで開始を告げる。私達は後ろに下がり、念のために私は指輪を一振り。

『氷結結界五重唱』

要求されたカスタム魔法陣が一瞬で浮かび上がる。詠唱破棄で一気に私達三人を包む五重結界を築いた。戦う直前の三人はかなり驚いていたようだが、すぐに気を取り直したようだ。

アシーナは大剣を楯のように構えて、その後ろでマリイが詠唱に入る。ハントシャルが踵で水面を軽く叩くと、無数の水の槍が湖面から現れ、うねりながらアシーナ達に襲いかかる。槍が到達する直前に、黒い剣が紫に輝き、水の槍を剣に引き寄せる。シユウシユウと音を立てて、槍は剣の玉に吸い込まれていった。アシーナは、スカート下に仕込んでいた拳銃をハントシャルに向け、一発二発と正確に狙い撃っている。風魔法で補正をかけているのか、銃弾は真っ直ぐハントシャルの眉間、右目、喉、心臓に吸い込まれるが、見えない壁に阻まれ、あらぬ方向へ弾かれる。

『火の精霊よ。我が契約に則り、応えよ。詠唱短縮術二三式を発動。』

掲げた右手が真っ赤に燃えるように輝き、マリイは詠唱を立て続けに発動。

『コード134。移動力強化』  
『コード286。障壁強化』  
『コード338。威力・貫通力強化』  
『コード021。煉獄の業火』

マリイの全身を青や黄色のエフェクトが光り踊る。この間、僅か十秒弱。炎剣を握りしめたマリイの輪郭がぶれ、直後に火花を打ち上げたような音が轟いた。ハントシャルが無言で巨大な水球のシールドを張った瞬間、炎剣が水球に衝突し、水球が内側に爆発する。落ちる位置に合わせて召還したホウキに降り立ち、マリイは気配を

探る。

「鍛練は怠っておらなんだな。よしよし」

いつの間にかマリーの背後に浮いていたハントシャルが、杖から青白い光の剣を発生させ、躊躇いなくマリーの首筋に剣を振るう。アシーナが間に滑り込んで、首に迫る光剣を受け止めた。鏝迫り合いになったが、黒剣の紫の光によって、ハントシャルの光剣が弱まっ  
ていく。

「全く面倒な魔剣じゃの。魔力殺しの剣『テュフォエウス』は」

「正確には魔力を殺しているのではなく、魔力を吸収、凝縮して剣の硬度を高め、身体を強化する剣です」

「律儀に答えんでよい！」

お互いの腹を蹴って弾き飛ばしあうと、ハントシャルは杖を一閃して氷の槍と水の刃を放ち、アシーナを牽制。その間を縫って、マリーがハントシャルの懐に飛び込み、炎剣とレイピアを容赦なく交互に叩き込む。ハントシャルも青く輝く杖で防ぎ、湖面の上で剣舞のごとく戦う。周囲の空気が無秩序に水蒸気爆発を起こし、刃と槍が飛び交う中、アシーナは止まることなく猛然と剣舞に突っ込んでいく。そして、アシーナがハントシャルの後ろから斬りつければ、それはもう、常人の理解を超えた戦いになっていた。一本の杖で、辺りに衝撃波を撒き散らす三本の高速の剣を防ぎ、流し、利用し、時に二人の喉や手首を打つ姿に、私達は黙って成り行きを見守った。しかも二人が必死な様子に比べて、ハントシャルは目が笑っていた。これでまだまだ余力を残している事に驚きを禁じえない。

歴然としたレベルの差を表したかのような様子を見ているうちに、

体がドクンと鳴る。焦点は剣舞の一点に絞られ、音が急速になくなっていく。私の脳が、何かを懸命に訴えている。

目眩かと思つてうずくまって目をつぶると、飲み込まれそうな常闇の世界に、一本の銀の巨木がノイズ混じりに見える。段々木が近づいているように見え、その根元に銀髪の、白磁の肌をした少女がいることに気づいた。

幻想的な彼女の歌が聞こえてくる。形容し難い美しい容姿と、魂を穿つ澄んだ歌声に、自分が陥っている状況を忘れそうになった。だが、白いワンピースの彼女が歌を止め、こちらを振り向いたので、それも収まった。ノイズが段々ひどくなり、彼女の顔がよく見えな

い。

彼女は歌うように話した。

『はあ、やっと来ましたか。お姉さまの方が五年も早かったですのに。では早速』

彼女のひんやりとした指先が私の額に触れ、優しく彼女は唱えた。  
『汝は癒し、技芸、知恵、魔術を司る吾が祝福を授かれる者。其は病魔を滅ぼし、技を編み出し、知識を遍く伝え、魔法の深淵を覗く者。また、吾は雷神ノウェンシレスの一。邪なる者を焼き滅ぼす者なり。汝、ここに開眼せよ』

また体がドクンと鳴る。沁みわたるギフトの核がうねり、私の全身を作り替える。

そうか。私のギフトの本質は……。

『さあ、お行きなさい』

目蓋の裏の映像が反転明滅した後、頭の中から押されたような感覚に目を開けた。結界の表面を見ると、一見変わらない自分の顔が映ったが、一点だけ変化していたので驚いた。虹彩の両縁に極小の文が刻まれており、その文が青白く輝いていたのだ。

i n c i d e n t . 3 ( 前書き )

結構真面目な小説っぽく書きました。  
暑い夏の日にとびつぽ。

しんしんと重苦しく降る雪の中、私はざくざくと雪を踏みしめる。今年になって私は晴れて、プランジヤ魔法学院に入学を果たした。だが、今の私はその余韻に全く浸っていなかった。ミシリと雪を踏み潰す。

「ああ、退屈だ。学院に淡い期待をしたのが間違いだった」

入学後、少しは浮き足立った自分が馬鹿だった、とエリザは思っていた。外国ならば、多少の身分を越えた友達を作れるかと思えば、真反対の結果になった。帝国や近隣国出身の同級生には畏れられるか媚びへつらわれ、連邦出身には悪魔だ魔王だと揶揄される。そういった取るに足らない奴らは、まとめてミンチにしたいものだが、如何せん。校則がそれを禁じている。

とにかく、私の名は良くも悪くも知られすぎていた。そのせいで、まともに付き合える友達は片手程。その彼女達も、今は実家に帰省している。ギフトの応用で、課題という学院との【戦争】に完全勝利した今、暇を持て余していた。

ふと上を見上げると、校長室が見える。たしか、学院長は室内の防犯に心血を注いでいたな。私はそれを思い出すと、片手で銃の形をつくり、人差し指の銃口に神経を集中した。蒼焰竜族の能力で、強引に周辺の魔力を根こそぎ引き寄せ、初級魔法の火の球を生み出す。それは見た目の小ささとは裏腹に、莫大なエネルギーを詰め込んだ超超高密度の球で、今か今かと超新星のように白く輝いていた。

照準を校長室に合わせる。魔法陣の構造維持限界出力を無視した一撃を見舞わそうとした直前、火球が霧散し、十重二十重の影の膜が私を包んだ。やっと来たか、と安心した。

「女性の不意を突いて、後ろに立つのは褒められたものではないな。学院長殿」

「私の部屋を空の彼方に吹き飛ばそうとした君に言われたくないね。第一皇女殿」

くくつと忍び笑いをするニールは、ポンと私の肩に手を置いた。

「一体何をするために、そんな物騒な物を撃ち込もうとしていたんだい？」

低く甘いバリトンが私の耳に届く。それは食虫植物の甘く危険な香りと同じだった。

「校長室の防犯性能のストレステストをしてみたかったのは建て前で、本音は暇でムシヤクシヤしたからだな」

ニールはしばらく何かを考えるかのように沈黙し、口を歪めた。

「フツ、やはり君はなかなか堅いね。私の傀儡術を完全レジストするとは」

「……この件、イザベルとして対応しましょうか」

「部屋を壊されそうで、ちょっとムシヤクシヤしたのさ。水に流してくれ」

学院長は素行に問題のある生徒を、軽度の傀儡術で強制改善するらしい。これが一番効率がよく、毒も使いようで薬になるな、と幽鬼は飄々と語った。そういう指導法は色々問題があるような気がするが、私も人の事は言えない。

「さて、私を呼び出した用はなんだい」

「少し散歩に付き合ってくれ。話し相手が欲しい」

「今、書類仕事で忙しいのだが。」

「そんな物、いつでもできるだろ。引きこもり気味の学院長も息抜

きは必要だ」

幽鬼族は体質が変化しないのをいいことに、不健康な生活を満喫しているニールは、苦笑いを浮かべた。

「なるほど、一理あるな。だが、その不敬な言葉遣いは何とかならないか。学院長の沽券に関わる」

「微塵も気にした事がない癖に。普段は敬語使ってるから別にいいだろ」

「はあ、参った参った。外出の準備をしてくるよ」

空一面を覆う鉛色の雲から、ちらちらと沈鬱な雪が降り落ち、プランジャの街一面を我が物顔で白一色に塗り潰す。緋色の外套越しに、雪の冷たさを感じる。ニールは歩幅が長く、時折追いかけていられなければならない。そうしなければならぬ様、ニールはわざとペースを落とさない。だが、そうやって悪意のない意地悪をしてくれるニールに感謝していた。

「なあ、ニール。私のペースを考えろ」

「おや、ギフトを使えば簡単だろ」

ただし、時折価値観の相違に呆れることがある。

「あのな、四六時中ギフトを行使したい奴なんかいるわけないだろ。私はなるべく、無意識の自己防衛以外は日常で使いたくない」

過ぎた能力の使用は怠惰に繋がる。例え便利でも、必要なければ使わない方がいい。ニールは悪かったと軽く謝り、私の脇をいきなりひよいと掴んだ。

「なっ、離せ。不埒者め」

私は背中を摘まれた猫みたいに、ぷらんと足を宙に浮かされた。そのままニールは、自分の肩に私を乗せ、所謂肩車をしてくれた。

「これ、してもらった事ないだろ」

「言つな……」

宮廷に自由は少なかった。勿論、父上に遊んでいただいたことなど殆どない。母上は私を産んで、亡くなられたそうだ。いつも父上とは公的な儀礼ばかりで、たまに私の部屋に来ても、息災か、欲しい物はあるか、と問う位だ。王としては優秀だが、父としては最低だ、と思っていた。今は宮殿を追い出されるよりはマシか、と割り切っている。

ざくざくと一對の足が冷たい雪を踏みしめる。早く用を済ませて帰宅しようと、人の頭の群がせわしなく動き回っている。ニールは不意に口を開いた。

「雪だな」

「そうだな」

「雪は、何だと思う？」

私は、ほんのり赤い腕を伸ばして雪を掴んだ。

「雪は…、掴めないものだ」

手を開くと、もうそこに雪はなかった。

「見るだけでは我慢できず、つい手に入れようとすると、たちどころに消えてしまう。だから、私は雪が嫌いだ」

ざく、ざく、ざく。ここからではニールの顔はよく見えない。ニールも私の顔は見えない。

「だが、俺達は雪の上を歩いている。歩けるんだよ、エリザ」

遠くにうつすらと学院が見える。儂い白雪はしつかり屋根に降り積もっている。

「ああ…、忘れていた。君宛ての新年状だ。ちょっと早いけど、渡しおこす」

ニールが懐から三枚の封筒を取り出し、私に差し出した。

「他の家からの贈り物に埋もれたら大変だからな。取っておいたのさ」

嫌に用意のいい奴だ。封蝋を見ると、一枚は父上からで、残りはパウロ達からだ。防水魔法を封筒全体にかけてから、丁寧さをかなぐり捨てて手紙を取り出す。そこには同じ内容の文面が綴られていた。

「何て書いてあったんだい？」

「内緒だ」

「それは残念」

ずっとニールの肩から飛び降り、こんこんと軽やかに雪が舞い降りる中、私はさくさくと雪を踏み鳴らしていった。

「……寒い」

私は荒い息で、モンスター氷柱があちこちに聳え立つ雪原のど真ん中で仁王立ちになっていた。服装はこの時期に反して軽装だが、ここでは魔法でどうにかなる。だが、魔法でもどうにもならないのが精神力だ。

『ミネルバ、魔法制御系をオートからセミオートに移行。現況で有効な探查魔法を再発動。生体恒常制御系は引き続き一時譲渡。体調、障壁は……共に異常なし。』

私の瞳が薄く光り、虹彩の両縁を飾る小さな古代文字列が一際明るく輝く。私以外には認識不可のスクリーンが前方下側に現れ、その画面上を落ち着いたモノトーンのグラフィックと英文字が踊る。

私の脳と連動するこれは、覚醒した時に例の少女がどうやら私の記憶を反映して、ギフトをより直感的に扱いやすいように、見た目を精神感応型モニターに変更したようだ。モニターを通してギフトを直感的に操作できるようになったのは素直に嬉しい。

さらに、私は試行錯誤にそれを弄り回し、ギフトが魔法の制御を代理できる事を発見した。魔力の収束から魔法の出力まで、ソーサダイトも意思も介在せず自動化でき、例えば常に障壁展開と迎撃をするようギフトに組み込む事ができる。先程の命令で、ギフトに

体の内部を自動制御、安定化させた。これがなかなか強力で、モーターの説明によると、持続時間は最大一日だが、自動制御中では病気になるのは勿論、耐寒耐熱と過酷な環境にも対応でき、耐毒もばっちりだ。ただ、ケガは内臓や眼球の損傷位までは瞬時に完治するが、頭と胴が泣き別れたり、床に叩きつけられたトマトみたいに頭がクラッシュした場合、つまり致死性で再生不可能な損傷はどうにもならない。

スクリーンに円上のグラフィックが表示される。二時の方向、距離五百に下位の雪鬼狼が十八体。五時の方向、距離二百に下位二十体と上位の雪鬼狼一体。九時の方向、距離七百にグラシヤルクが二頭いると、アイコンが示していた。私は思わずため息をつく。「こんな夢、二度と見たくないものだ」

私が夢幻魔法を掛けられてから、現実時間で八時間になる。夢の中では食事や睡眠は不要だが、逆に緊張を常に強いられる。いや、本当は寝たいはずなのだが眠れない。お腹も空くはずなのに食欲が全くない。我が師匠は大したサディストだ、と認識を改めた。

ところでこの夢は、ハントシヤルの嫌な思い出を切り貼りして再構築した物らしいのだが、現実時間で一日経たないと夢から目覚めない。現実の一日は夢の中の三日に相当する。今回の性能テストのテーマは「ギフトの耐久性」だが、今になってこのテストだけは提案しなければ良かった、と悔やむ。

おちおちと思案に耽っていると、斜め後ろから濃厚な殺意を感じ

る。体を起こした私は、雪をのそりと払い、顔をそちらに向ける。冴え渡る青空の下、一頭のリーダーとその子分達が私の方へ猛然と走ってきている。

「何度倒しても湧いてくるな、こいつらは」

出会い頭に左手の人差し指で、気だるく横にビツと一凧ぎすると、雪鬼狼が次々と、頭から尻尾まで横に裂けていく。凧いだ面の延長上にある電子をギフトで操作して、物質の結合力を断ち切っただけだが、今のところ一番使い勝手のいい攻撃魔法だ。

『氷結結界』

ボスをスライスしたら、すぐに死体を凍結させる。死体を放っておくと、血の臭いに惹かれて、わらわらモンスターがやって来て酷い目にあつたからだ。焼いても煙で感づかれてしまうから質が悪い。

360度一面真っ白の平面で物陰も洞窟もなく、四六時中モンスターに襲われ続ける。それに、夢に落とされる前に、ハントシャルが「一度死ぬと、二度と目が覚めない。」と脅してきたため、無気力に生きる事も叶わない。

思考が散漫になりかけ、ギフトが強制的に私を覚醒させる。翼が空気を切り裂く音からして、もうグラシャルクが来たのだろう。不

意に彼らが現れると、先制攻撃とばかりに凍結プレスを撃ってくる。ギフトは堅固なバリアでプレスを防ぎ、お返しとばかりに無数の火球で迎撃する。そして、モニター上のグラフィックが目まぐるしく変化すると、一つのウィンドウを表示した。

『【無常の刹鬼】を発動。』

火球で身動きが取れなくなった二頭の銀竜に、圧倒的な死が襲いかかる。禍々しい赤い光の膜が二頭の哀れな獲物を丸ごと覆うと、球状の膜がゆっくり収縮し始める。膜は内側の物質を魔力で強引に圧縮し、そのまま銀竜に喰らいつく。メリメリと生々しい音を立てながら、竜は叫ぶ間もなくボーリング大の肉塊に成り果てた。

銀竜の最期に何の感慨も浮かばず、疲弊した精神で残り時間を数える。あと二日間、約50時間戦い続けなさいといけない。ギフトがなければ、とつくに精神が壊れていただろうな、とぼつと考える。そついや寝ている間、私の肉体はどうなっているんだろう。

モニターが突然敵のアイコンを表示し、私に警告する。

真上？

私と敵のアイコンがぴったり重なっているのを確認した途端、空から小さな影が勢いよく落ちてきて、私ごと雪原を吹き飛ばした。

黒髪の少年が寝ているベッドの周りで、ハントシャルとマリーがじっと見守っていた。ハントシャルが落ち着いて目をつぶっているのに対し、マリーはそわそわとしていた。

「ああ、落ち着いていられないわ。まだ目覚めないの？」

「安心せい。あと16時間程で起きるわい」

「それなら良いんだけど」

ハントシャルは眉を幾分吊り下ろした。実はマリーに不眠不休で戦闘している事を教えていない。気持ちだけハントシャルは謝罪する。「坊やめ、本当にしぶといの」

ハントシャルは、いまだにパウロが目覚めない事に少なからず驚いていた。パウロに嘘をついて、実際には夢の中で死んだり意識を失ったら起きるようにしていたのだが、片目に映るパウロの夢の断片を見る限り、パウロは自力で過酷な環境に耐える技を身につけたようだった。食事と睡眠を必要としないとしても、冬の荒野で三日間戦えるだろうか。

八時間が過ぎた頃に、自分が最近苦戦した相手がパウロの夢に現れるようハントシャルは設定した。今から七年前、ギフトの覚醒と共に、幼くして危険な人格を身につけた彼女。おそらく一番情け容赦がなかった頃だった、と老人は振り返る。何にせよ結果はわからんな、とハントシャルは再び目をつぶった。

section・20 (前書き)

バトルはここで一区切りとなります。

フラクタル図形ってこんな感じ。

```
http://upload.wikimedia.org/wi  
kipedia/commons/5/5c/Mandelzo  
m12satellitespirallywheel  
withjuliainlands.jpg
```

もんどりうつって着地した私は口に入った雪を吐き出し、クレータ  
ーの中心を見据える。雪霞が晴れて現れたのは、扇情的な黒いドレ  
スを着た十歳の少女だった。流れる二房の金髪にラピスラズリの瞳、  
白くきめ細やかな肌に淡桃色の唇。どうみてもエリザその人だった  
が、彼女の帯びている殺気と歪んだ笑みに、とても同一視できな  
かった。

心を鬼にして躊躇わずに指を爪ぎ、首を斬ろうとしたが。

「いない!？」

「ここだ、痴れ者」

輪郭がぶれ、ギフトの感覚強化さえ認識できない程の速度で少女  
が私に接近して、抜刀したレイピアで喉を掻き斬ろうとするも、常  
時展開している私のバリアに阻まれた。激しい溶接のようなスパ  
ークの中、彼女の吸い込まれそうな瞳と目が合う。純然な恐怖、絶対  
的な捕食者を前にしたかのような感覚に陥る。

直後、ガラスを引き裂く音と同時にレイピアが粉碎。それに彼女  
の注意がそれた隙に蹴り飛ばす。

ゴインと鉄柱でも叩いたような音に私は顔を顰める。実は未来から  
やってきたAIなのでは、と考えてしまった。

砲弾と化した彼女の手元に炎剣が現れる。剣はグングン魔力を吸

い取り、炎の色が赤青白と輝き始める。モニターの警告を見るまでもなく、私は最大加速で反対方向に飛翔する。あまりに急激な運動の変化に、あらゆる強化魔法をかけた体でも口から血を吐きそうになる。あれに巻き込まれてはいけない、という本能の叫びは果たして正しかったようで、音の壁を突き破った私に灼熱の熱波と衝撃波が襲いかかってくる。顔だけ振り返れば、巨大な隕石の衝突があったのだろうか、地面が捲り上がって天を呑み込みまんとする溶岩と土砂の津波を引き起こし、モニターは熱源が太陽のコロナに達するという事実を突きつける。理不尽も程々にしろ、と心中悪態をつきながら、高度四千米辺りで停止し、超戦略級魔法の構築に取り掛かる。

飛来物や熱波をギフトが自動で対処する間、私は淡々と毎秒数千の命令をモニターで処理していく。モニター上に表示されている仮想魔法陣は、美しいオウム貝型フラクタル（ジュリア集合）が編み込まれており、恐らくハントシャルでも転移魔法の亜流としか理解できないと思われる。

発動準備が整ったのを確認した直後、鳥肌を伴う直感に従い左に体をずらすと、ついさっきまで自分が居た場所を、大気圏を貫く巨大な炎剣が横切る。一瞬通り過ぎただけで鉄をも溶かす熱量を感じて冷や汗がでる。

とん、と背中小さな手の感触がした。

「うむ、妾をよくここまで楽しませてくれたの。面白いぞ。さすがは姉妹神の祝福を授かっておるだけはある」

裕にドラゴンを吹き飛ばせる掌底を背中に喰らい、地面に叩きつけられる。背中から真っ赤な鉄棒を刺して、内臓をそのまま焼いてい

るような激しい痛みが私を蹂躪した。打撃音が小さい分、内部にダメージがいきやすい。獲物をいたぶるため、わざと死なないように力を加減したのだろう。私のバリアが溶岩の地面を半球状に抉ったまま、私はだらつと俯せで宙に浮いていた。地形さえ変える力に無力感を感じる。実際は無類の強さを誇る彼女だからこそ、例外的に負けている事にこの時は気がつかなかった。

しばらくしてダメージも完治した頃に、すくと陸に降り立った少女がゆっくりこちらを歩いてきた。地獄もかくやと言いたくなるような煮え立つ大地の上を、皮膚を焼き焦がす灰燼と大気の中を、汚れ傷一つなく悠然と立っている。少女が人形の無機質な笑顔を貼り付けている事に、身の毛がよだつ恐怖に包み込まれた。

「勝負あったな。ははは、分身の身であっても久しい全力解放は気持ちよいの」

「……あなたは誰なんです」

「イザベルに決まっておるであろう」

「私の記憶とかなり食い違いますが」

「妾はギフトが覚醒したばかりの人格での。何、そんなにおしゃべりをしたい気分でもないし、ここで死んでもらうか」

まだ神経を焼く痛みを歯でぎりつと食い縛って我慢し、なんとか体を起こす。夢の中で死ぬのは情けない。ここで死ぬには、遣り残している事が多すぎる。だが、多分正攻法では勝てない。例え核弾頭を打ち込んでも、目の前の少女を倒せないだろう。やはり、ここは一か八か……。

「いえ、あなたに殺されるわけにはいきません」

「どういう意味だ？自殺か」

「まあ、そうかもしれません」

にじり汗を出しながらも、発動命令をギフトに出した。予めスタンバイしていた禁じ手の魔法が発動する。もう誰にも止められない。

『【マグネターフレア】が発動。術者に危害が及ぶ恐れ有り。速やかな回避を推奨。』

イザベルは何か面白い事が起こるのか、と腕組みをして発動を待っている。ここで殺しておけばよい物かと思いつながら、成層圏に浮かび上がり、全天を覆う巨大な青色の魔法陣を見つめる。この魔法でエラーが先か、死ぬのが先か。

魔力が嵐となって魔法陣の中心に集まり臨界点に達した瞬間、ぱつと魔法陣がまばゆく輝き、とある物体が中心に転移してきた。見た目は半径10km位の隕石だが、物質密度が10億t/cm<sup>3</sup>もある超高密度の物体、中性子星である。恒星の終末形態の一つだが、その威力のスケールは計り知れない。それが夢幻世界に突然現れればどうなるかは想像に難くない。空間全体がガラスのように亀裂が入り、神のギフトさえ霞んでしまう圧倒的な力が世界を白に塗りつぶす。それを感じたのも一瞬で、直後に闇が私を覆った。

「で、最後のあれは何なのじゃ。なぜわしの夢幻魔法が解呪ではなく、破碎されたのじゃ」  
無事に起きる事ができ、アシーナ達がドタバタと遅めの朝食を用意している間、私はハントシャルと性能実験の結果、及び評価と考察を重ねていた。

今のギフトの実力は単純な高い戦闘力だけでなく、魔法の自動制御を応用した、雪原や火山などの過酷な環境に耐え得る高い身体恒常性も備えており、自動制御のバリアも十分活用できるレベルだった。しかし、アルテナのギフトによる不合理的な攻撃には耐え切れないう程度でもあった。これは後にじっくり研鑽を積むしかない、とひとまず保留にする。

ハントシャルの嘘のせいで生き残る術を探していた私は、皇女に勝てなくても負けずに離脱すればと思い、夢幻世界を破壊する魔法を考えた。あまり時間がなかったので、のんびり解呪魔法を模索せずに強硬策を選んだ。ハントシャルから学んだ転移魔法を応用して、天文学的広範囲で条件に合致した物体を即時に転移させる魔法を開発し、実行した。転移した超高密度物体は夢幻世界の想定外の代物で、出現した瞬間に夢幻魔法の機能が破綻してしまったらしい。

「先生の魔法が設定した現象を超えた現象を起こして、エラーを無理矢理発生させたんです」  
ハントシャルはまた頭を抱え始めたが、命のかかった究極の選択だったので大目に見て欲しい。

「それで、わしの夢幻世界に星を転移させた、というのか……」

「現実にやったら、とんでもない事になりますけどね」  
「まあ、そんなのじゃが。ところで」

老人がにやにや笑いながら、私に素朴な疑問を投げかけた。

「どうやって、あのような星を予見したのじゃ。まさか妄想ではあるまいな。」

藪から棒をつつくような問いかけに、返答に行き詰ってしまった。首からつーっと汗がでる。真を言えば私が前世の記憶持ちであるのがばれ、嘘を言えば嫌な意味で大変想像力の豊かな少年と断定されてしまう。この時代の誰が、スプーン一杯分でそこらの山よりも重い物体が実在する、と考えられるだろうか。実際は知識でわかっているのだけれど、実証データもなく確信する私を客観的に見れば、それはそれは失笑ものだろう。

仕方があるまい。ここは必死の言い訳で逃げるしかない。

「あの時は夢の中だったので、突拍子もない事を考えてしまったのでしょうか。その時のことは、もうあまり思い出せません」

「じゃが、少しは」

「そもそも！！夢の中では普通の思考とはかけ離れた事を思いつくのはよく有る事です。たとえ私の表層意識が夢幻世界の中で存在していたとしても、同時に私の心の深層もあつたはず。つまり、私は

たしかにでももだがしかし」

四百字原稿を百枚は行く内容を軽々と機関銃のごとく話し倒し、結局食事の準備ができるまでの間に、ハントシヤルは何を尋ねようとしていたのか思い出せなくなってしまう。私は地味な危機が回避されて安堵を漏らすとともに、中性子星転移事件を心の焼却炉にくべて、忘れることにした。



s e c t i o n . 2 0 ( 後書き )

仕事が山場で次話は更新遅れそうです。

i n c i d e n t . 2 - 1 ( 前 書 き )

主人公はしばらくお休みです。

ブラウンジャ建国歴432年の雨の季節、浄罪の月が煌々と街並みを照らす。体の芯までにじむ暗い冬の風を避けようと、人々は家や酒場で暖をとり、大いに騒ぐ。小狭な酒場の赤錆びた扉を開けると、ぐつと鼻をつく酒の臭いと耳を叩く酔っ払いの喧騒に包まれる。乾いたジョッキを叩き、口から肉の油をしたたらせ、べらんめいな歌と踊りに歓声と口笛が返ってくる。褐色のブランデーや赤黒いワインのボトルが並ぶカウンターで、寡黙なマスターが客に酒や軽食をふるまい、時に相談相手になり、時に仲介屋や情報屋になるこの酒場は『眠る小熊亭』である。

今夜も酒の染みがついたカウンターに客が二人席についた。一人は白い簡素な外套を羽織った清楚な長身の妙齡の女で、もう一人は顎髭を蓄えたずんぐりむっくりな中年男であった。ここのひよる長いマスター、ジェス・ジェームスは洗い済みの皿を片付けると、ドテドテとカウンターへ歩み寄った。

「よう、マーヴェル。今日もやってきたか。あんた、ここに入り浸っていると上さんに逃げられるぜ。」

「話いつけて来てっからいいんだよ。ったく、人のケツを探ってんじゃねえ。」

「わりいな。お節介って奴かね。んで、いつものか。」

「ああ、380年物で。」

「あの樽、そろそろ空になるから見納めかもな。隣の野郎、失礼、お嬢さんは何にする。」

「あ、あたしは……。」

「あゝ、こいつあ初めてだからブラウンエールで。」

「あいよ。他には？」

拒否のジェスチャーを受け取ったマスターは奥に引っ込んだ。それを見届けたマーヴェルはカチコチに緊張している隣の女性に話しかける。

「そんなに固くなるなつて。別に誰もお前さんを気にしちやいねえ」

「わ、わかってるけど、あまりこつこついう空気に入った事ないから」

「連邦のひなびた田舎の出の娘とは聞いてっけど、もうここに移つてから十一年なんだろ。さつと順応したらどうよ」

丁寧に磨かれたカウンターに、ダンとジョッキが置かれた。女性に気を利かせてサイズは小さくしてある。

「そ、そのつもりよ。それにひなびた田舎じゃなくて、エインスルカつて立派な都市から来たのよ」

「クリス、その風光明媚な所の割にやあ、御のぼりさんみてえだが」  
マーヴェルが頬杖をつくとき、まもなくコニヤックのストレートが現れた。太い指でグラスをつかみ、クリスに掲げる。

「ほら、乾杯だ」

「ああ、その、グラスをぶつけるアレかしら」

「そのアレだ」

しなやかで細い手で危なっかしくジョッキを掲げる。ゆらゆらと揺れるジョッキを見て、早く降ろしてやらねばと思ったマーヴェルは、すぐにチンと優しくグラスをぶつける。

「魔法学院錬金学科助教就任おめでとよ、クリスティー・ヘース  
ディングズ」

学問の研究に凌ぎを削るプランジャでは、七年制の学校を卒業した後、それぞれの学科で一定以上の成績を残した者のみ研究科に進学する事ができ、さらに四年の間に提出した論文が学術評議会の審査を通過し、学院長の会合である最高議会に認められた者が教員の

資格を得る。プランジヤの教員免許を持つ事は出世を約束する証でもあり、ずっとプランジヤに残る者もいれば祖国や金払いの良い国に仕官する者もいる。ただしプランジヤで教鞭を執る者は学院長と七回もじっくり面接を受け、教員の適性があるかどうかテストされる。

「ありがとう。でもほんつと、肩が凝るわ。上から下まで、内臓まで見透かされた感じだったわ」

「当たり前えよ。ニールはまだ四十代なのに、どうやって学院長の座に登りつめたか知らんだろ」

「ええ」

「あいつ、元プランジヤ国軍諜報部隊、通称【黒い部屋】の長官だったんだぞ。あいつに弱みを掴まれて、出世代わりに監獄行きになった奴もいる」

「……できれば敵にしたくない人ね」

「普通に生きていれば問題ないだろうよ。あんたもこの国で悪くみだけはしねえ方がいい。自分の影に殺されるぜ」

「ご忠告感謝するわ。それにしてもあなた位よ、わざわざ私を祝おうとする人なんて」

「あと数秘学と物理学の飲み仲間も呼んだんだが、忙しいから賀意だけ伝えてくれ、て言われてたんだ」

「数秘学ってサイツェフ教授よね。また話たかったわ」

「今年の研修期間で充分話す機会はあるだろうし。どっかで会えるさ」

他愛ない話をしばらくした後、クリスが意地の悪い笑みを浮かべながら、あっ、と手を打つ。

「そっいえばマーヴェル。あの後、例の船はどうなったの？」

飲みかけていたコニヤックに咽せてしまう。

「それを思い出させんじゃねえ。試作品にドラゴンが蹴りを入れるなんざあ思ってたんだよ！」

「ドラゴンも何者かに退治されたし、死人が出なかったから良かったけど、あれから大変だったんでしょ？」

「まあな。後処理もあれだったが、減給三ヶ月は正直かなりへこんだわ。ああ、蒸し返すな。酒がまずくなる」

「あら、ごめんなさいね」

「はあ、お前の方も例の件はどうなんだよ」

クリスは綺麗に首もとで切り揃えたブロンドを掻き撫で、両手でジヨッキを持ちながら、くつくつと可愛らしくエールを飲む。さりげなく無言で遮音境界を張った所を見て、マーヴェルは素直に感心する。この国は情報漏洩が殺人より罪が重い事で有名だ。

「あれ、かなり厄介よ。写しの一枚目は鏡文字に簡単な字の並び替えなんだけど、文章の内容が、無限の濃度の違いを示唆する物だったの」

「はあ？濃度？」

「ええ、初めて読んだ時は笑いそうになったけど、後ろに添付されていた図を見ると、笑い話に見えなくなったの。厳密な証明じゃなかったけど、説得力のある議論だったわ」

「……つまり」

「その執筆者は既成の概念を破壊、いえ、拡張してやるって暗示してるの」

「すげえな」

「でも、これも彼あるいは彼女の専門ではないみたいなの」

クリスの目が段々鋭くなる。

「二枚目の写しからは……。ああ、まだ機密レベルがAみたい。□から言葉が消されてるわ」

「そんなにヤバいのか」

「私は面接の時にごく一部見せられたんだけど、文章は大きく四種類の文字を使った、もはや何かのアートのような言語で書かれているのよ。それも、羽根ペンと筆で書いているの」

「いよいよ挑戦状みたいだな」

「学院長が言うには、歴史家は今、言語学の文献を漁りまくってるらしいし、考古学の連中も滅びた文明の亜流なんじゃないか、て当たりをつけてるらしいわ。今の所、旧エスタリア地方の碑文に刻まれている、一字一字が意味を持つ象形文字が有力候補みたいよ」

「へえ、腰の重いあいつらでも動いたか。なあ、あんたは学院長から……。あれ、いつからイニシヤルまで機密扱いに。とにかく、例のそいつは誰だか訊いた事あるか」

じんわりと体に火が灯る感触に快感を感じて、マーヴェルはぐいっと鍛冶で鍛えられた背をしならせる。張り出された大胸筋を、赤面しながらもちらちらと見てしまう自身を叱咤するために、クリスは軽く咳払いをした。

「はぐらかされてしまったわ。助教授権限ぐらいじゃ最高評議会の権限下にある軍の諜報は扱えないし、情報統制が働いているみたいで、『商会』ですら火消しが回ってる。もうその人の情報が機密レベルAに格上げされた今、身元を知る術はあたしにないわ」

「ニールめ、本気だぜ。国家の巨大な利益になる案がゴロゴロ詰まってるもんな」

「そうよね。それに、あたし新任だから私有の情報ルートも持っていない。精々筆跡から想像するしかないわ」

「例えば？」

「多分その人は女性。あんな細くて小さな丸みを帯びた字は、普通

女性か子供のものよ。達筆だったし」

「ガキが書いたかもしんねえぞ」

「マーヴェル、あなた本気で言ってるの？」

「俺はあんまり冗談は言わねえぜ」

「じゃあ、あなた風に言い換えるかね。ガキが新世代の船を一から設計できると思ってるのか、かしら」

「無理だな。じゃあ、ここの教育を受けた女なのか。だが、慣習的に女が受ける分野に見えねえし、何よりこんな才能を持っていたら、とうにどっかで有名になってるだろ。騎士学科のマリーとアシーナとマルス、医学・薬草学科のシュナイダーとリリー、錬金学科のミハエル。ここ最近俺の耳に入った有名人はこれだけだぜ」

「錬金学とか物理学はここ二十年、停滞気味なのよね。は、エインスルカじゃドジ巫女って呼ばれてたあたしがちゃんと教師やってけるかしら。まともな論文書き続けなといけないし、このまま干されるんじゃないかしら」

空になったジョッキを前に押しやって、火照った頬をカウンターに押し付ける。少しひんやりとしていて、クリスはふはあっと息を吐いた。

「おいおい、就任祝いに落ち込んでどうすんだよ。」

「ううん、ただ世の中には凄い事を閃く人がいるんだなあ、て思っただけよ。もしあの手紙一通だけでも実現すれば、どうなるかしら。きつと素敵な未来になるわ。そう思わない？」

クリスは胸が熱くなるのを感じていた。

マーヴェルはグラスにもう五杯目を注ぎ、ぐっと呷る。

「ここは文明の最果ての国、学びの街のプランジャだ。俺達は歴史の発展をいつも引っ張ってきた。他国よりも進んだ学問、思想、芸

術で自治を掴み取った誇り高い国だ。黎明期の威光が弱まっている今、またあの栄華を取り戻せる兆しが見えてきたじゃねえか。これに興奮しねえ奴はいねえ」

だん、とグラスを叩き割る勢いでカウンターに置き、なんとノック一つで遮音結界を破り、牧歌的な歌を歌い出した。陽気なテノールの旋律が流れる。その場にいた人達はつられて歌い出す。皆が酒を酌み交わし、歌を歌って笑い、一日の労苦を流す。その歌は酒場の壁を越え、夜空の月まで届いた。

人は古き良き時を懐かしみ、今日一日に感謝し、さらなる期待を明日にのぞむ。後に黄金期と呼ばれる時代を迎えるのもう間近である。

i n c i d e n t . 2 - 2 ( 前 書 き )

これでプロローグは終わりです。

デトネ連邦の大動脈である四大連立都市の最北端、城塞都市エインスルカはシリンド帝国との国境から約十km南に位置する。北の裏門は峻険な高山に挟まった一本道のみ通じ、黒曜石色の城壁が非常に堅固に作られている。また、千年大分裂時代より太古の時代、魔族を統率して人間を絶望と恐怖に陥れた大魔王ルシャント・ハーマンによって創り出された一対の魔盾が埋め込まれており、それを触媒にして球状の結界が常に都市全体にかかっている。勿論、反り返った刺々しい裏門が一番結界が分厚く、並大抵の魔法や兵器では門にかすりもしない。さらに、この城壁も外郭でしかなく、内側にも二重の防壁を備えている。

プランジャ暦419年、すなわち連邦暦042年の『第五次エインスルカ防衛戦』で見事に帝国軍を迎撃し、拳げ句に追撃した結果、軍事境界線を山の反対側のスイッツ庄まで押し出した出来事からも、この都市の防衛力がいかに強力かが想像できる。

そして、この城塞都市には大きく二つの要所、王宮アンセラゴンと神殿エクセリオンがある。王宮アンセラゴンは都市の中心に聳え立ち、勇壮な白い塔に旗が緩やかにはためている。城一面の白い石は特殊な蛍光性があり、星と月が散りばめられた夜のピロードの中、淡いサファイアを彷彿させるアンセラゴンはどこか幻想的である。誰が見ても、暁の白亜と黄昏の燐光に心を奪われてしまう。これが城塞都市という無骨な名称に可憐な花を添えている。

王宮の裏には神殿の尖塔があり、ここから鳴らされる鐘が街に時を告げる役目を担う。神殿は王宮と同じ材質で造られ、一階に最大の宗教派閥、精霊崇拜の礼拝堂がある。宗教は大まかに分けると、精霊崇拜と各神への崇拜、後は部族の英霊崇拜となるが、ギフトを通じて一番身近に触れ合える精霊が大衆に一番人気があるようだ。文字を知らない大衆もまだ多かった時代、小難しい説法よりも感覚でわかる類の方が理解しやすい。昨今は識字率が若干高まったが、カムシャフには掃いて捨てる程の神がいるために全ての神を覚えている人は少なく、自分の職業や身分に関係する神の祭りに参加するのが慣例である。いつもは自然の化身である精霊に感謝し、その時に応じた神に祈る。人々はなんとも便利に神を扱っているものである。

ただし、例外はある。ここ最近の帝国は、アルテナ信仰の権威が急速に成長し、帝国全体が覇権主義に染まっている様子で、連邦を始め各国は少なからず警戒感を示している。宥和政策で帝国から連邦に割譲されたスウィッツ庄は気候、水利、土壤に恵まれた土地で、帝国でも有数の穀物生産地であった。十中八九この地方を奪還すべく再び侵攻してくるだろう、とエインスルカの識者達は北に立ち上る戦火を幻視して憂鬱になっていた。

さて、このような時勢の最中、神殿では一年に一度の大事な儀式、守護結界の更新が密やかに行われていた。萌芽の季節に執り行われるこの儀式は、特別な鍛錬を行った六人の十歳の巫女見習いが魔法陣の構築から詠唱まで完全に息を合わせながら発動させないと完成しない特殊な物で、巫女見習いは修練の大半をこれの練習に費やすとまで言われている。これを成し遂げて、エインスルカでは一人前の巫女と認められる。

満月が高く登りつめた頃、窓から月光が礼拝堂のゴシックタイルに注がれ、六人の少女を照らす。最も位階の高い白のマントを羽織り、十歳にしては小股の切れ上がった少女が、さつと左手を前にかざす。

### 【断罪の鉄杖】

人差し指に嵌めた指輪の白い宝石から緑色の光が溢れ、指輪が杖の形に収束する。やがて、先端に、絡み合う鳶を模した装飾が施された白銀の杖が現れる。溢れ出る光の奔流は少女の全身を包み込む。次の瞬間、肩と背中を露出させ、腰のくびれにしなやかなリボンを付け、ふんわりとしたスカートを着けた姿になる。さらに、それを持つ少女がビスクドールに紛う程に美しく、あどけなさや相まって息を飲む魅力を引き出している。ぱつちりと開かれた黒い瞳は井戸の底よりも深く、艶やかに二つに巻いた黒髪は清水のように冷たい。また、遠く東の地より訪れた民の末裔である彼女の匂いを聞けば、不思議な陶酔感が感じられる。

『守護結界再構築儀式を始めます』

彼女の杖先から赤い光球が飛び出し、円形に並んだ六人の真ん中に浮かびあがる。他の五人の少女も召還した鉄杖を前に掲げ、全員が一斉に杖を振り下ろす。ガンと響く共に光球が舞い散り、頭上に六角形の赤い陣が乱れ咲く。

シャン、シャラン、カン。

杖が真円を描き、蔦の中にはめ込まれた鈴が一切ずれる事なく鳴り響く。紡がれる密語に反応して魔法陣は急速に縦横斜めに回転し、より構成が複雑になっていく。真円の中心では白、赤、青、緑、黄、黒のマントがぐるりと回り、少女達の体が各々の色の暖かい光に包まれる。一時的に精霊と肉体を融合できる彼女達は、魔法陣や詠唱の出力と安定性を飛躍的に上げていた。魔法陣の回転も臨界へと向かう。

『数多の精霊よ。時は満ちた。今ここに、かの誓言に応えん』

正六角に向かい合う少女達が、蕾が開くように、はらりと動いて白を囲む正五角に変化する。そして、六本の杖が天井の一点を指して発動する。

### 【憎悪を抱く拒絶の盾】

塔全体がいつそう蒼く輝き、そこから溢れ出る魔力の嵐が結界全体を満たした。星の銀砂をそのまま街に降ろしたような光景が広がり、見る者を啞然とさせたのであった。

さて、そんな魔法を引き起こした張本人達は寮に通じる回廊でガヤガヤと騒いでいた。

「あゝ、やっと終わった。ステラちゃん、明日は一日ぱーっとやつちやいましてよ！」

骨のない間延びした声が響いた。赤いマントを羽織った、愛嬌があるセミロングの女の子、『火のパトリシア』が彼女達のリーダーに話しかけた。

「私は辞退させて頂くわ、パーティー。私達の使命はエインスルカ、ひいては連邦の盾となり、一人でも多くの命を救い、不幸な者を生み出さない事よ。崇高な目的の前に、怠惰な行動は慎みなさい」

六人の巫女のトップ、白の法衣を羽織る『虹のステラ』が素っ気なく応えた。ヒストイックな生の果てにこそ、真の幸せを掴み取れると信望するステラに不必要な享樂など有り得なかった。

「そうですか……。ステラちゃん、みんなを纏めて頑張ってるから、その……。ごめんなさい。」

「ちょっと言い方キツ過ぎない？ 勇気出して誘ったパーティーちゃんがかわいそうよ」

「……………」  
髪を一括りに束ねた緑の巫女、『風のカトリナ』が、しゅんとうなだれるパーティーを庇いながら、ステラに突っかった。カトリナ後のショートカットの青の巫女、『水のシェリル』に至ってはじっ

とステラの瞳を覗きこんでいた。猫を粗雑に扱ったような罪悪感が湧いたステラが謝ろうとした直前に邪魔が入った。

「おい、んなガキ臭い事で争うなよ。それよりも金だ、金。あのウサギ、きつとたんまりポーナス用意してくれるよな」

「ナヴァ、がめつい上に目上の人に対して無礼な発言、それに場をわきまえない割り込み方に、実に不愉快です」

「あーあー、うぜー。前から思ってたけど、そんなにカリカリしたら小皺が増えるぜ」

そして、ステラの中で極めつけに相容れない、吊り目でウルフカツトを靡かせた黄色の巫女、『雷のナヴァ』が、バチバチと指輪から放電させながらステラに向かって来た。ステラは思わず眉が引きつった。

二人が掴みかかりそうになる寸前に回廊の横から、ゆらりと司教服を着た二足歩行の白兔が現れる。初めて見た人からすれば、可愛らしすぎて頬擦りしたくなる姿だが、その実、巫女達の絶対の上司であり、特に六人にとって命の恩人である。

はたと気付いた六人は膝を曲げて頭を深く下げる。

「サリエル様、不敬をお許しください」

「ふふつ、その程度で咎める程、僕は安くないよ。顔を上げて立ちなさい」

恐る恐る顔を上げるステラ達は、宙に浮かぶ兔の顔を見た。無機質な赤い瞳からは何も考えが読み取れない。

「儀式は上手くいったみたいだね」

「はい。綻びは消滅し、魔力の循環代謝が安定稼働域まで高まりました」

「なら、当分問題ないね。今年は僕も気になって仕方なかったんだ。昨日、杖に実装したあの新機能はどうだった？」

その途端、六人が顔を赤らめたり、ばつの悪い顔をしたり、口への字に曲げたりした。

「実用的な問題はありませんでしたが、その……、一つだけ、致命的な問題がありました」

「うん、何だい？」

「……ドロワーズがありませんでした」

長い長い沈黙が回廊を征圧した。

「なんて事だ。すっかり忘れていたよ」

片手で頭を抑え、宙をよるめいたサリエルは、右耳をピツと一閃する。彼女達の指輪が一瞬光り、元に戻った。

「すまない、ドレスの機能ばかり目がいつてたんだ」

「いえ、サリエル様が謝られる事はありません。私達のためにこのような上質な魔道具を作っただけで満足です」

「気遣い感謝するよ、ステラ。ところで、君達にビッグニュースがあるんだ」

薄暗い闇の中、冷酷な程に赤い双眸が六人を見下ろす。

「君達にはプランジヤの魔法学院に入ってもらおうよ。勿論拒否権はない」

「突かぬ事をお訊きしますが、どういった経緯でしょうか」

五人の驚きようは不自然ではなかった。本来なら、連邦各地の教会に配属されるはずだったからだ。サリエルは服の寄れを直しながら話した。

「うーん、主な理由は、君達がかつてない程優秀だからかな。ここで寝かせておくには君達は勿体無いと思って、上に掛け合ったら了承してくれたのさ」

「え、じゃあ。サリエル様、私達はあのプランジヤに行けるの!？」  
「良い子でいたらね、パティール」

両手を握り合わせて喜ぶパティールとカトリナを見て、ナヴァは口を歪める。ステラは不承不承だが命令なら仕方無し、と軽く溜め息を吐く。

「しかし、私達はまだ二等騎士相当になったばかりです。自己負担では……」

「うちの寄付金から全部出すから大丈夫。こういう時は欲深い人間どもも役に立つ」

それ、人前では私刑にされますよ、とナヴァが言葉を添えてせせら笑う。カトリナが拳骨でナヴァを沈めるのを見届けたステラは朗々と真顔で返事をした。

「わかりました。異国の者達と共に学び、布教で学院を制圧すればよろしいですね」

「いや。布教はしなくていいよ。そこまで困ってないから」

五人がサリエルに暇を告げて去った後、黒のマントを羽織った巫女、『土のサーシャ』が薄笑いを浮かべた。

「いいのですか。あの子達に本当の理由を言わないでサリエルは五人が出た扉を無表情に見つめる。」

「あの子達が政治を知るには、十歳の精神は脆すぎる。それに、僕にいつまでも依存されては困るんだよ」

「でも、あなたに出逢わなければ確実に五人とも死んでいたでしょうね」

「今も魂の契約で生かしてるんだ。あの子達が笑うようになるまで、随分時間がかかったよ」

この結界は、発動させる者が、暗く重い過去を背負っている程、強力になる。

「普通なら廃人になっておかしくない不幸を背負ってるんだから、仕方がないんじゃないかしら。私ならあっさり殺して楽にしてあげるのに、あなたったら本当に司教らしくなったわね」

「僕も罪深いエゴイストだよ。救えたはずの人間の多くを切り捨てて、素材が優秀なあの子達を拾ったんだから」

「それも容姿の良い子だけをね」

「偶々だよ。第一、僕は人間のメスに欲が湧かない。それにしても時の流れって、おかしいものだよ。千年も前に君と殺し合った、魔族四天王の継承者であるこの僕が、君と人間の幼子の行く末を語るうとは。人類を導く精霊信仰の聖地の結界に、魔族の黒魔法を使うなんて狂気の沙汰だよ」

サーシャは少し湿り気を帯びた黒髪を手で梳く。

「私も遠い未来は読めないわ。何回転生しても、ギフトでも予知で  
きない事が起こってしまう」

「だからこそ、生きる事に退屈しないのさ。そうだろ、サーシャ？」

運命を司る黒髪の少女は、こくりと頷いた。

i n c i d e n t . 2 - 2 ( 後書き )

これで登場人物の層も厚くなってきました。  
ストーリーも重厚にできそうです。

s e c t i o n ・ 2 1 ( 前 書 き )

学院編スタートです。  
あゝ、長かった。

ハントシャルの鍛錬を受け、三人で魔法を調べて研鑽し、空いた時間に私が二人に勉強を教える日々を過ごしている内に、もう十歳の夏を迎えてしまった。光陰矢のごとしとはよく言ったものだ、と過去に想いを馳せる。

設計技師になりたいと誓った少年時代

必死に勉強して軍に入り、設計技師になつた青年時代

素敵な半身に出会い、愛する子供達を授かつた壮年時代

最終決戦で大切な友人であるパイロットが英雄として散り、二年後に追うようにして死んだ老年時代

全ては、もう遠い過去。私は一片の蝶となつて、夢と現をひらひらと彷徨う。私は過去に縋りついて夢の中を歩いているのか、現実に明日を見いだして過去を想っているのか、時々わからなくなる。多分両方なのだろう。私の過去はこの世界に存在しないかもしれない。でも、確かに私の過去だと思ふし、いまだに夢とも思つてしまふこの世界でも、確かに私の現実だと思つている。

夢と現の境界はなくなつてしまったのだ、と溜め息を吐く。いかに、私はまた憂鬱モードに入ってしまった。こんな事でネガティブになつてたらどうしようもない、と自分に喝を入れる。

ところで、私は前から気になっていた事があった。私の肉体が精神にどれほど影響があるのか、という事だ。肉体ありきの精神ならば、私の精神は若返ってもおかしくない。リビドーの減退した精神に、感情を揺さぶるホルモンの分泌が活発になりつつある肉体が干渉すればどうなるか、脳科学者ではない私には想像もつかない。一つだけ分かっているのは、ギフトでは解決できないという事実だ。

「ねえ、大丈夫？気分悪いの？」

はっと意識を現実に向けると、学院に行く馬車に全ての荷物を載せ終えた所だった。単調な作業をすると、要らぬ思考に走るのは私の悪い癖だ。

「ありがとう。なんでもない」

その言葉に、デイーは心配そうな顔をする。

「ならいいけど。私、マリー様からきいてるわよ。パウロったら、夜中に突然起きて何かガリガリ書いてるからびっくりしたって」

「それは妙ですね。結界で消音は完璧なはず」

「……やっぱりね」

聴いて呆れた、とデイーは腕を組んだ。どうやらカマをかけられたようだ。

「私はパウロの才能は認めてる。魔法の腕前は、悔しいけどいまだに追いつけないし、錬金学とか物理学じゃ、パウロはもう最先端を突っ走ってるのも何となく感じてる。この世界が無数の原子でできている、その粒を構成する電子のやり取りで大概の現象が説明でき

るって考えはすごいと思うよ。まだ、電子の位置が確率でしか表せないのはよくわかんないけど」

一気にまくし立てたデイーは、もう一度深く息を吸う。

「パウロが描いている設計図だってそう。すごく洗練された船とか、それに、潜水艦？飛行機？まだ魔法でさえ叶えた事がない物まで考えてるもの。私もお兄様も、それでいて優しいパウロを友達にできて嬉しい。だから、私達は心配してるの。パウロは、やろうと思えば不眠不休で生きていける。無理を強引に通す力を持っている」  
「ペンだこができた私の両手が、デイーの白い手に柔らかく包まれる。」「だけど、無理は絶対しないで。そんな力は使わなくていい。力を使わないのも、一つの力だと思うの」

私は胸を射抜かれた感じがした。エルフとはいえ、十歳でそんな言葉をかけてくるとは思ってもみなかったからだ。

「お兄様は照れ屋だから言わないけど、私と同じ気持ちよ」  
ふとデイーの後ろを覗くと、窓越しにひよつこりとアンディが顔を出していた。

「それでね、え〜と。あの、私ね……」

「二人とも、もう出発の時間よ！！」

マリーが私達に声をかけた。

「心配してくれてありがとう。行きましようか」

「え、ああ、うん」

そのまま自然に体を離し、カチコチのデイーを放置して馬車の方に走っていく。乗り口で両親が立っていた。マリーはデイーの方を見て、くすくす笑っている。

「それでは、行って参ります。父上、母上」

「ふふ、行ってらっしゃい。たまには手紙を書くのよ」

「あまり馬鹿な事はするなよ。派手なだけなら別に構わんが」

「どうせ、外交で息子自慢したいだけでしょ」

しれっと答えたマリーに、トマスは本気で驚いたようだ。

「なぜわかった!」

「だってあなた、仕事以外は馬鹿なもの。あなたの考えてる事ぐらい手に取るようにわかるわ」

「なあ、パウロ。いつからマリーは心を読めるようになったんだ?」  
「ここは空気を読んでおこご。」

「いえ、父上の顔にいつも書いてありますよ」

「なんだと!?!」

「もうあなた、これ以上とぼけないで頂戴。さあ、乗りなさい」

先に私が乗り、ディーを手で引つ張り挙げる。

「では、セバス。安全運転、宜しく頼むよ」

「畏まりました」

ガラガラと馬車が走り出すと、私は段々眠くなった。あの後、ディーは何も話さずに頭をクシャクシャ掻いたり足をバタバタさせ、今は頭を私の膝に乗せて寝ている。

薄れゆく意識の中、外の景色を眺めるアンディの独り言が耳に入  
った。

「ほんつと、女ってよくわかんないな」

世界を越えても共通点があるのか、と思うも束の間に、私は安らかな暗闇へ羽ばたいていった。

プランジャでは魔法、騎士、芸術、鍛冶、帝王の五学院を各棟に据えている、通称『五角城』と呼ばれる巨大な建物を中心に、街が放射状に広がっている。中心付近は学生が使う文房具屋や服飾店、図書館が占めており、外側に住居が建ち並んでおり、各棟に面した大通りはそれぞれ魔法通りや騎士通りと屈託ない名前が、横路は小熊小路といった愛称がつけられている。また、船による通商に欠かせないアムリ川の支流が街の東側を南北に流れているため、水上の交通も盛んだ。本流沿岸の貿易都市カンベから、直接交易品を運ぶのがこの街の商人のスタイルとなっている。

学校の生活に必要な物を買い揃えた数日後、仰々しい校門をくぐって持ち物を自分の部屋に運んだ。昼から始まる入学式まで、私達は学校を散策することにした。それぞれが城塞級の巨大建築物である五角城もさることながら、広大な中庭には驚きを隠せない。白と黒のタイルで敷き詰められた石畳に、シンメトリーを完璧に守った庭園が広がっている。庭の中には練兵場や温室など幾つかの施設があり、四面体に磨き上げられたアメジストが、中空で紫色に輝いていた。

二人は初めて本格的な大庭園を見て、少なからず興奮していた。今まで郊外に住んでいたから無理もあるまい。

「ホウキがないのであまり遠くに行つてはいけませんよ。迷子になりますからね」

「わかつてるつて。すぐ戻るから」

「パウロは探検しないの？」

「ここで日向ぼっこしときます」

秋風が優しく頬を撫でる中、青く澄み渡る日差しを浴びて頭を空っぽにする以上の楽しみが他にあるつか。アンディはやれやれと首を傾げた。

「いつも通りマイペースだな。デュー、行こうぜ」  
なんでそんなにおじんくさいかな、などとブツブツ言いながら、デューはアンディの後をついていった。年甲斐もなく、とはこの事だろうか。誠に私の存在は奇妙千万である。

暖かい陽光、髪の上を踊る風、さわさわと鳴く涼しげな草原の香り。目蓋を閉じて満喫していると、人の気配をふと感じた。目をうつすら開けると、左手によく知る気高い女性が映る。

「久しぶりだな、パウロ。待っていたぞ」  
黄金色を湛えた二房の穂が鼻をくすぐる。何も邪気を感じられない蒼い瞳が私を覗き込む。

「こちらこそ。無事に会えて嬉しいです。学生生活は楽しんでいますか？随分と大所帯のようですが」

ここからは見えないが、八人のアイコンが私達を注視している。おそらく皇女様の取り巻きなのだろう。案の定、エリザは苦笑いをした。

「生憎、外も中と殆ど同じだったよ。改めて身の上を痛感させられたのさ」

「良い薬は苦い、と相場は決まってるもんです」  
「確かに」

よいしょと体を起こして、大庭園の草原に視線を向ける。身分が能力以上に重視される帝国の価値観は、近隣に逃げた所で変わらないだろう。ここは他国に比べて幾分マシだが。

「あの双子はどうした？」

「庭園を散歩してますよ。八つ刻の鐘楼には戻るでしょう」  
まだ二刻は猶予がある。

「一緒に行つてあげなくていいの？」

「十にもなつたんです。各々が好きにすればいいじゃないですか」  
瞳の淵を飾る二重の環が淡く光り、ここから見えない二人を映す。

どうやら噴水辺りをうろついているようだ。

腰に手を当てて、うんと体を伸ばす。ちらっと目を流すと、学生服を纏った端正な容姿に新たな世界を見たような気がした。エリザはにやりと笑う。

「全くお前という奴は、どうしてそんなに子供らしくないのだ」

「あなたに言われたくはないですね」

「むっ、その言い方はないだろう。私は皇女という公の身分があったのだ……」

「わかってますよ。それで、私をどうしたいのです」

目をぱちくりとさせたエリザは、唇をつんと尖らせた。

「頭がキレるのもつまらんな。驚かせにくくなる」

「およそ見当がつくんです。どうせ何かの引き込みでしょう」

有望な新人勧誘はこの業界にもある。問題はこういった目的なのか、に絞られる。

「その通り。ああ、硬くならなくていいぞ。私が入っている同好会に誘いたいだけだ」

学院には学生主導の同好会があり、そこで生徒達は思い思いの活動に勤しむらしい。

「どのような」

「クリス先生の『錬金研究会』とザイツェフ先生の『数を愛でる会』、あとは『紅茶愛好会』に所属している。強制参加じゃないからストレスがないしな」

なるほど。自分がやってみたい分野をサークルで活動できるのか。私は期待を胸の内に弾ませた。私の熱い探究心を受け止められる場所が見えてきた。

「エリザは科学に興味があったのですか」

「私は盲目的な宗教より、頭で理解できる科学の方が好みなんだ。そもそも天にまします我らが神がこの世を造り給うたならば、その法を知る力が科学だ。だから、私は己の神を知るために科学を取った。それだけだ」

もつとも、きつかけはパウロとの出会いだけどな、とエリザは付け加えた。

「考えておきます」

「ああ、良い返事を期待している」

エリザが立ち去ろうとした足をぴたっと止めた。不穏な気配を察して、私は振り返り、そして驚いた。

「あら、これも精霊様のお導きかしら。はじめまして、私はサーシヤ。今後よろしなに」

「……シエリル」

制服を着た二人の少女が立っていた。得体の知れない何かを感じ、汗がにじんだ。

s e c t i o n ・ 2 3 ( 前 書 き )

微修正しました

「私はエリザ。こちらはパウロだ」

「初めまして」

手を差し出すと、サーシャがぐいっと掴んだ。

触れれば壊れそうな華奢な腕とは裏腹に、手に込められた力はかなり力強い。

「良い魂をお持ちね」

…………… 宗教関係の人だろうか。

それになんだろう、内臓を探られている感覚がするのに魔法の構成陣が私の目に映らない。

サーシャは困惑する私と入れ替わって、エリザに握手する。

「エリザさんは…………… まだみたいです」

怪訝そうに眉を寄せる皇女。

「何がだ？」

「ふふつ、来春には手前の畔の春草も見頃を迎えるでしょう」

途端にエリザは茹蛸のように顔が赤くなる。何を言ってるのか、私にはさっぱりわからなかった。

「お、お前は、恥じらいを知らんのか!？」

「殿方の前であわてふためくエリザさんってかわいいですね」

「あの、さっきのはどういう意味ですか」

「…………… 隠語」

「？」

「パウロ、お前は一生知るな。いや、今すぐ忘れろ」

ふむ、女同士しか通じない言葉なのだろうか。見識のために後で調べておこう。それにしても、クスツとほくそ笑むサーシャは、年にそぐわない妖艶な香りがした。皇女から軽々とイニシアチブを取ると、くるりと私の方に向き直る。

「私、盾の乙女の一、サーシャ・ドラグノフは御二方にはお話しなければならぬ事があるので、今夜の十一刻、尖塔の最上階でまた会いましょう」

言うだけ言った後、二人は駆け足で去っていった。エリザは火照った頬に左手を当てて、ジトッと私を睨んだ。

「潰す！」

理性がどうのこうの判断する前に、上体を思いっきりかがめると、頭上を右手が通過した。どうやら渾身のアッパーだったようで、足下のタイルがビシッとひび割れ、真上の雲が千切れ飛ぶ。冷や汗がだらだらである。

「お、落ち着いて」

「落ち着いていられるか。あのガキ、後で覚えておけ！」

新入生に弄ばれたのが悔しかったのか、エリザを宥めるのに小一時間かかった。取り巻きがいなくて良かったと思った。入学式の前に騒動を起こすのは御免だからだ。

「あの、盾の乙女ってやはりアレですよ？」

落ち着きを取り戻したエリザは、腕を組んで目をつぶった。

「ああ、エインスルカの盾の乙女の事だろう。あれは精霊教の聖地、エインスルカの代名詞と呼ばれる位有名だ。歴史だけは古いからな」

「はあ」

「事の起こりは、千年も昔にアナスタシアという聖女が魔王を倒す

道中、傷付いた体をそこで癒やし、神聖結界を張った事かららしい。そこに聖女が引き連れていた魔術師の秘伝を継承した五人の巫女が、魔族四天王と闘ってボロボロになった聖女を治療したそう。今の巫女とは随分役割が違うな」

レトロゲームの設定にありがちな話に脱力しそうになる。

「それで、聖女は魔王を倒してハッピーエンドだったんでしょ」「テンプレートな結末だろうと思いきや、エリザは残念そうに首を振った。」

「死闘の末、相討ちで死んだ。それに、魔王勢力が減んだ事で人間の結末は瓦解。魔王に洗脳されていた魔族は当然迫害を受けた。誰の得にもならなかったんだ」  
それももう昔の話だがな、と哀しげに俯いた。暗に、まだ今も根深く人の心に残っているとほめかしていた。

盾の乙女、精霊、聖女、魔王、そして、神のギフト。

判然としない相関図が、私の頭を錯綜していた。

どう、上手くいった？

ああ、視界も音もばつちりだったよ。学院の守護結界を抜くとは流

石だね。

論理的に当然の結果よ。誉めるには早すぎるわ。こっちは？

……問題なし。スクランブルは良好。タイムラグは誤差の範囲内。

よろしい。で、私の見立てで合ってたかしら？

予想され得る標準波形パターン225683通りから適合率八割以上のパターンを抽出。該当パターン総数を百とすると、ミネルバが八七、氷精霊上位が七、雷精霊上位が六。

ふふ、ばっちりね。

前から思ってたけど、どこからそんな大量のサンプルを手に入れたんだい？

反応水晶よりも精度を高くするには、少なくとも一万は必要ははずだけど。

……ウロボロス、でしょ？

正解。あなたもその小さい頭で考えたらわかるでしょうに。

くだらない皮肉は慎みたまえ。さて、君達は定時報告を欠かさないでくれ。ボクは報告をまとめて議会に提出しないといけないからね。映像記憶はボクの方にも転写できるようにしよう。

覗きは辞めなさいよ？

前にも同族以外は興味ないと言ったはずだ。接続する時は頭の中でベルを合図にする。では十二時間後に。

もう、堅物なんだから。そうだ、定時はあなたがやってよ。

いやです。私はあくまでツールに過ぎません。ちなみにこの双方向同期念話はあと十三秒で落ちます。言い残す事はありませんね？

えっ、あと十秒？ん、どっっしよっかな。熱い紅茶が飲みた

プチッ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5102t/>

---

技術師 in 魔法世界

2011年10月5日22時50分発行